

中国における「留守児童問題」への批判的検討

— 隔世育児の農村留守児童の影響に関する研究から —

18GP101 欧陽 仁萍

中国における「留守児童問題」への批判的検討
 — 隔世育児の農村留守児童の影響に関する研究から —

序章	4
第1節 研究背景と目的	4
第2節 研究方法	5
第3節 研究意義	5
第4節 基本概念の解釈	6
第1項 「農村留守児童」の基本概念	6
第2項 「隔世育児」の基本概念	7
第1章 中国における「農村留守児童問題」のこれまで	8
第1節 農村留守児童の背景	8
第1項 農村留守児童形成の背景	8
第2項 農村留守児童の全体的状況	9
第2節 「農村留守児童問題」の出現とその形成要因	11
第3節 「農村留守児童問題」への批判に関する先行研究	12
第1項 農村留守児童問題の誇大化、汚名化と脱問題化	12
第2項 先行研究に対する考察	13
第2章 隔世育児の農村留守児童への影響に関する研究	14
第1節 文献の採択基準と検索方法	14
第2節 文献選定のプロセス	14
第3節 文献整理の方法	15
第4節 文献概要とその分析結果	15
第1項 否定的な影響 (34編)	15
第2項 肯定的な影響 (3編)	23
第3項 中立的な影響 (6編)	24
第3章 「隔世育児の農村留守児童への影響」の結果についての考察	27
第1節 隔世育児の概念定義の食い違い	27
第1項 家族構成と居住様式	27
第2項 祖父母の育児への参加度	28
第3項 父母もしくは父母の一方の外出労働	28
第2節 隔世育児への先入観の存在	29
第1項 祖父母の養育スタイルへの先入観	30
第2項 農村留守児童の家族関係への先入観	33
第3項 農村留守児童の家庭構造への先入観	34
第3節 対象文献の研究対象	34
第1項 多くの農村留守児童も祖父母と片親と生活している	34
第2項 シングルペアレントの児童は農村留守児童ではない	39
第3項 父母の外出労働する地理的範囲	40
第4節 農村留守児童と非留守児童との比較	40
第1項 非留守児童も隔世育児である	40

第2項 農村留守児童と非留守児童の人数と割合	44
第5節 対象文献のサンプル	46
第6節 小括	47
終章 中国における「留守児童問題」への批判的検討	49
第1節 祖父母のみによる育児モデルに片親が混じっていること	49
第2節 祖父母の養育スタイルへの検討	49
第3節 教育における祖父母の役割	50
第4節 今後の課題	50
対象文献 (43 編)	51
引用・参考文献	54
引用・参考 Website	55

序章

第1節 研究背景と目的

1949年の建国以来、中国政府は工業化と都市化に力を入れてきた。その結果、資源が都市に偏り、農村の基盤施設や生活条件の改善は見過ごされ、農民の収入水準は都市と比べて低い状態が続いた。1978年の改革開放政策では、経済が急速に発展したが、都市と農村の格差はさらに拡大した。政府は戸籍制度を緩和し、農民に都市への移住を許可したが、都市での福祉サービスや雇用機会は限られていた。経済的要因から、多くの農民が都市部で働くことを選んだが、彼らが就く都市での仕事は低賃金で不安定であり、家族を養うには不十分だった。このため、農民工¹は子どもを農村に残し、家族と長期にわたり分離されることが多くなった。戸籍制度は農村人口の都市流入の障害となり、農村出身者は都市で同等の社会福祉や公共サービス（例えば、公立学校への入学権や医療保険など）を享受できなかった。このような背景の下、多くの農民工が長距離での外出労働を選択し、家族との長期にわたる地理的分離が生じている。この分離は家庭生活の常態となり、それによって農村留守児童という特殊な集団が生まれた。これらは中国特有の都市化プロセスの副産物であり、政府の都市と工業への偏重政策、経済的動因、戸籍制度の制約が原因である。

2000年以降、親と離れて生活し、生活面や心理面で問題を抱える農村留守児童は、社会の各界から注目されるようになった。「中国農村における留守児童は問題だ」という批判は、政府、メディア、研究者から頻りに上がっており、中国の国内のみならず国外でも広く流通している。しかし、一部の研究者は「農村留守児童は問題児童ではない」という見解を持っている。任運昌（2008）と羅静他（2009）の研究は、学術界において農村留守児童を問題児童と見なす一般的な傾向があり、この視点はしばしばこのグループに対する偏見と汚名となっていることを明らかにした。彼らの発見は、社会と学術界に対して、農村留守児童に対するネガティブなレッテルを避け、より客観的でバランスの取れた視点を採用するよう呼びかけているものである。江立華（2011）は、研究はより厳格で客観的であるべきであり、農村留守児童への同情とケアという「感情と道徳的配慮」が科学的研究の態度と結果に影響を与えないようにし、事実に基づいた公平で偏りのない分析を行うべきであると主張している。全体として、これらの研究は、研究方法、態度、対象集団に対する厳密さと客観性の重要性を強調し、社会と学術界に農村留守児童を理解し支援するためのよりバランスが取れた包括的な視点の採用を呼びかけている。

農村留守児童問題に関する検討の過程で、一部の研究者は農村留守児童の肯定的な側面や潜在的な長所を探求しようと試みている。これらの研究はしばしば、農村留守児童と非留守児童の各方面での表現を比較し、農村留守児童が非留守児童よりも優れているか、劣っているか、または同じであるかという、複雑な個人差を「長所と短所」の比較に単純化するアプローチを採っている。しかし、こういった単純化は、背後にあるより多くの社会的、経済的、家庭環境の要因を見落としに繋がりがかねない。また、農村留守児童の諸問題を明らかにする多数の研究に比べて、留守児童問題に対する客観的且つ反省的な研究は相対的に少ない。現在の農村留守児童に関する研究方法が厳密な科学的態度を十分に反映しているかを検証し、これらの研究の客観性について探求を行うことが重要であると考えられる。

現代中国社会において、農村留守児童問題は、通常「隔世育児」（祖父母育児）の問題とされている。一般的な見解では、農村留守児童は祖父母による監護を欠いており、その

¹ 農民工とは、非農業の仕事に従事する、農業戸籍者のことを指す中国特有の用語法である。従来の中国では、非農業従事の労働者を「工人」、農業従事の労働者を「農民」と呼ぶ。

祖父母は教育水準が低いことから養育を重視し教育を軽視する傾向があり、農村留守児童は過度な甘やかしにより自立性が低く、自己中心のかつ気まぐれな性格を形成するとされている。学術界では隔世育児が農村留守児童にもたらす影響が数多く報告されているが、これらの研究の客観性や科学的厳密さに対する反省は少なく、検討が必要である。

したがって、本研究は農村留守児童問題の原因の一つである隔世育児の観点から出発し、現代における「隔世育児が農村留守児童に与える影響」に関する研究結果の信頼性を評価することを目指している。さらに、農村留守児童問題が通常考えられている祖父母の養育スタイルに起因するかについて、検討を行う。

第2節 研究方法

研究方法としては、隔世育児の農村留守児童への影響を論じた文献を調査することとする。

文献調査の目的：

1. 隔世育児が農村留守児童にはどのような影響を及ぼすとされているのかを明らかにし、隔世育児が及ぼす農村留守児童への影響は肯定的か、否定的か判断する。
2. 研究者が選択した研究対象、実施方法、調査ツール、調査サンプルに関して検討することで、結論が客観性を持つかどうかを推測する。基本的概念、基礎的な測定方法が結論にはどのように影響するかを探る。
3. 農村留守児童問題が通常考えられている祖父母の養育スタイルに起因するか否かを探求する。

文献検索：中国学術情報データベース（CNKI）で2023年10月から12月にかけて文献を検索した。隔世育児や農村留守児童に関連する様々なキーワードを用いた。

文献選定プロセス：

抽出された2310件の文献から、研究テーマに関連する学術論文と学位論文を選び出し、①研究テーマと関係ない文献（例えば世代間衝突、祖父母の退職後の生活に関連するもの）、②外国の祖父母の子育て、③重複文献、④都市部における隔世育児、⑤農村児童の隔世育児に焦点を当てた研究でありながら、農村留守児童に関する言及がない論文、を削除した。その結果、最終的に43編の文献が対象文献として選定された。

文献整理方法：

第一段階：文献の基本情報（タイトル、著者、発表年度、研究目的など）を整理する。

第二段階：文献の特徴（調査対象、対象者数、調査地域など）に基づいて分類し整理する。

第三段階：研究上の不足点を整理し、存在する問題を分類して議論する。

第3節 研究意義

現代中国社会において、農村留守児童問題は、通常「隔世育児」の問題とされている。本研究は農村留守児童問題の原因の一つであるとされる隔世育児の観点から、「隔世育児が農村留守児童に与える影響」に関する研究結果を批判的に検討することを目指している。とりわけ、農村留守児童問題が通常考えられている祖父母の養育スタイルに起因するか否かは本研究の重要な論点である。この問題を扱うことには、以下の二つの重要な意義があ

る。

第一に、隔世育児研究の客観性を検討することは、隔世育児が農村留守児童に実際に与える影響をより正確に評価する上で役立つ。研究者が選択した研究対象、方法論等から、その結論の説得力を検証し、概念定義や基礎的な測定手法がどのように結論に影響を及ぼすかを探求し、研究結果の問題を明らかにすることができる。また、隔世育児に存在する問題が一般に想定される祖父母の養育スタイルに起因するか否かを探求することで、隔世育児の問題が祖父母の養育スタイル以外によって生じている可能性を指摘できる。

第二に、農村留守児童問題は隔世育児問題であるという言説を批判することで、農村留守児童問題および隔世育児問題をより厳密に定義し、問題の多面性を把握した研究が進展することに寄与する。

第4節 基本概念の解釈

第1項 「農村留守児童」の基本概念

現在、学界で農村留守児童の概念定義に関する相違が存在する。その相違は主に五つの側面において認められる。それは、①児童の年齢の限界、②片親が外出して労働する場合を留守児童として定義するかどうか、③父母の外出労働の期間がどの程度以上で留守状態と判断するか、④父母が外出労働する際の地理的範囲、および⑤農村地域の範囲である。

1. 児童の年齢の限界

農村留守児童の年齢に関する定義における見解の相違が存在している。多数の研究では農村留守児童の年齢上限を16歳（汪采玉・賈勇宏 2022；王偉他 2014）としているが、14歳（沙莎・苗春鳳 2023）、17歳（段成栄・楊舸 2008）あるいは18歳（周福林・段成栄 2006）とするべきだと考える研究もある。また、一部の研究では、農村留守児童の年齢範囲を6～16歳と定義しており、これは義務教育段階の児童を指している（吳霓 2004）。

2. 片親が外出して労働する場合を留守児童として定義するかどうか

多くの研究では、農村留守児童は父母もしくは父母の一方（片親）が外出して労働する児童と定義されている（段成栄・楊舸 2008；羅静他 2009；吳霓 2004）。しかし、父母が共に外出労働した場合にのみ農村留守児童と定義する論文も存在する（林宏 2003）。

3. 父母の外出労働の期間がどの程度以上で留守状態と判断するか

父母がどの程度の期間外出している場合に児童を留守状態と判断するかについて、多くの研究は親が半年以上（周福林・段成栄 2006；高亞兵 2008；張晶晶他 2015）外出している場合を留守児童の基準として設定する。しかし、三ヶ月（袁鳳琴・袁真強 2010）、四ヶ月（霍紅他 2023）以上と定める研究も存在する。

4. 父母が外出労働する際の地理的範囲

多数の研究で、親の外出労働の地理的範囲は通常「父母または父母の一方が農村地域から他の地域へ移動すること」（段成栄・楊舸 2008；羅静他 2009；王偉他 2014）または「他の地域で労働や商売をすること」（謝芳・楊齊 2015）と定義される。しかし、この定義における「他の地域」への移動とは具体的に都市、県、鎮、それとも他の農村地域（中国の行政区分は、省>市>県>鎮、郷）のどのレベルの移動を指すのか明確でない。

5. 農村地域の範囲

留守児童に関する農村地域の定義は、学术界で広く引用される農村留守児童の人口データが人口普查や抽出調査の結果に基づく。これらのデータは、中国の戸籍属性（都市戸籍と農業戸籍）に基づいて分類される。具体的に、子どもの戸籍属性が農村で、父母またはその一方が外出して労働する場合、その子どもを農村留守児童と定義する。注意すべき点は、「農村留守児童」の基準を満たすか否かは、子どもの戸籍属性によって決まり、居住地ではないことである。たとえ子どもが都市の戸籍に属していても、現時点で農村に住んでいる場合、「農村留守児童」には含まれない。また、子どもの戸籍が農村にあり、県や鎮で学校に通う場合も、農村留守児童とみなされる。

国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFP）が共同で発表した「2020年中国児童人口状況の事実とデータ」によると、留守児童とは、父母またはその一方が郷鎮や街道を越えて半年以上流動し、原籍に留まり父母と共に生活できない0歳から17歳までの児童を指す。農村留守児童は、留守児童の中で戸籍の所在地が農村である児童を指す。

本研究では、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFPA）が共同で発表した複数の報告に基づいており、その定義をより詳細にした概念を採用した。即ち、農村留守児童とは、戸籍が農村にあり、父母または父母の一方が郷、鎮以外の地域に外出して労働し、子どもが戸籍地に留まり、親子が分離している期間が少なくとも半年以上の17歳以下の児童を指す。また、この子どもの戸籍地が農村である場合でも、県域で学校に通っている場合も、同様に農村留守児童とみなされる。

第2項 「隔世育児」の基本概念

中国における隔世育児の概念は、狭義及び広義の隔世育児という二つの定義に分けられる。これらの主要な差異は、後者が育児過程における親世代の参与を包含するのに対し、前者はそのような参与を包含しない点にある。李炎（2003）によれば、隔世育児とは祖父母が親の代わりに孫の養育及び教育の責任を単独で負うことを指す（狭義の隔世育児）。一方、李洪曾（2002）は、三世代が同居する家庭構造において、祖父母と親が育児過程に共同で参与する状況を隔世育児と定義する（広義の隔世育児）。

本研究では、「農村留守児童問題」が従来の研究で祖父母による育児問題とされていることを問題とし、養育スタイルを厳格に区分するため、基本的には隔世育児を狭義の隔世育児を指す概念枠組みとして位置づけている。ただし、先行研究等において隔世育児を広義の意味で用いているため、隔世育児研究に関する言及や、先行研究を叙述する際には広義の隔世育児を用いる必要がある。そのため、一般概念として用いられた隔世育児と狭義の隔世育児との区分が必要な場合には、対象ができるだけ明瞭になるように文章を補って利用する。

第1章 中国における「農村留守児童問題」のこれまで

第1節 農村留守児童の背景

中国における農村留守児童問題は、現代中国社会において普遍的かつ特有の社会現象として認識されている。この現象に関する研究を進めるにあたり、初めに農村留守児童の成因を分析することが不可欠である。本章の第1節では、中華人民共和国の成立以降から21世紀初頭に至るまでの都市と農村の格差の歴史的変遷を検討し、この中国社会特有の現象の根源を探究する。また、中国の農村留守児童の現状を全面的に把握するために、彼らの人口規模、年齢層、地域的分布、居住様式、就学状況について包括的な分析を行った。

第1項 農村留守児童形成の背景

1949年の中華人民共和国成立以降、中国政府は工業化と都市化を推進することに注力してきたが、これらの政策は農民や農村地域に圧力を与えることが多かった。その圧力は、資源を都市に偏重させることや農村から都市への人口流動に制限を加える形で現れた(陳斌開・林毅夫 2013)。

中国政府は建国以来、工業化と都市化の進行に重点を置いており、これが都市への資源の偏重を招いた。この政策的優先順位の結果、工業および都市建設に政府の大規模な投資がなされる一方で、農村の基盤施設や農民の生活条件の改善は相対的に見過ごされた。このような資源の配分方式により、農村地域の発展が遅れ、農民の収入水準は低いままだった。同時に、政府は戸籍制度を通じて厳格な人口流動の制限を実施し、農民は経済的に遅れた農村に縛られ、都市への移住が制限された(陸銘・陳釗 2004)。

1978年の改革開放政策以降、日本及び西洋諸国からの資金融資と投資が中国に流入し、その結果、中国経済は急速に発展した。しかし、この時期においても、経済政策は依然として都市を中心に展開されており、都市と農村の経済水準の差は一層顕著になった。また、改革開放の流れの中で、都市部の労働力不足を補うため、政府は戸籍制度の制約を一定程度緩和し、農民に対して都市への自由な移住を許可した。しかし、この移住は労働目的に限定され、地域市民と同等の福祉サービスや公平な雇用機会を享受することは依然として困難だった(蔡昉他 2001)。

経済的な要因は、中国の農民が大量に都市部へ出稼ぎに行く主要な動機の一つとされている。中国経済の迅速な発展と都市化の進展に伴い、都市地域における労働力の需要は増加し続けているが、農村地域では就業機会が比較的限られている。農村の伝統的な農業生産方式は、土地資源の限界や労働力コストの上昇などの問題に直面しており、農民の収入水準は低く、生活の質も高くない。これに対し、都市地域の賃金水準は相対的に高く、多くの農民が都市部での労働を求めて移動した。農民は外出して労働することで、農村での収入よりも高い収入を得ることができ、生活水準を向上させることが可能である(譚深 2011)。

しかし、都市で従事する仕事が多くは低賃金の単純労働や肉体労働であるため、農民工の収入は家族全員を都市で養うには通常不十分である。さらに、彼らの仕事の性質が一時的または契約的であり、不安定性と不確実性をもっているため、多くの農民工は子どもを連れて移住する費用や責任を負うことができない。その結果、経済的圧力の下、彼らは子どもを農村に残すことを余儀なくされ、子どもは祖父母や親戚によって面倒を見られている(蔡禾・王進 2007)。

改革開放以降、中国の戸籍制度は一定の緩和を見せたが、それでも農村人口の都市への流入を阻む主要な障害となっている。中国の戸籍政策によれば、農村住民は農業戸籍、都市住民は都市戸籍をもつことになる。農業戸籍の住民は都市へ移住することは可能である

が、地元住民と同等の社会福祉や公共サービスを楽しむことはできない。これには、公立学校への入学権や医療保険などが含まれる。その結果、農村出身の子どもが父母と共に都市に移住した場合、就学において困難に直面する可能性がある。これは彼らが子どもを連れて都市で生活する可能性をさらに制約する要因となっている（李玲 2001）。

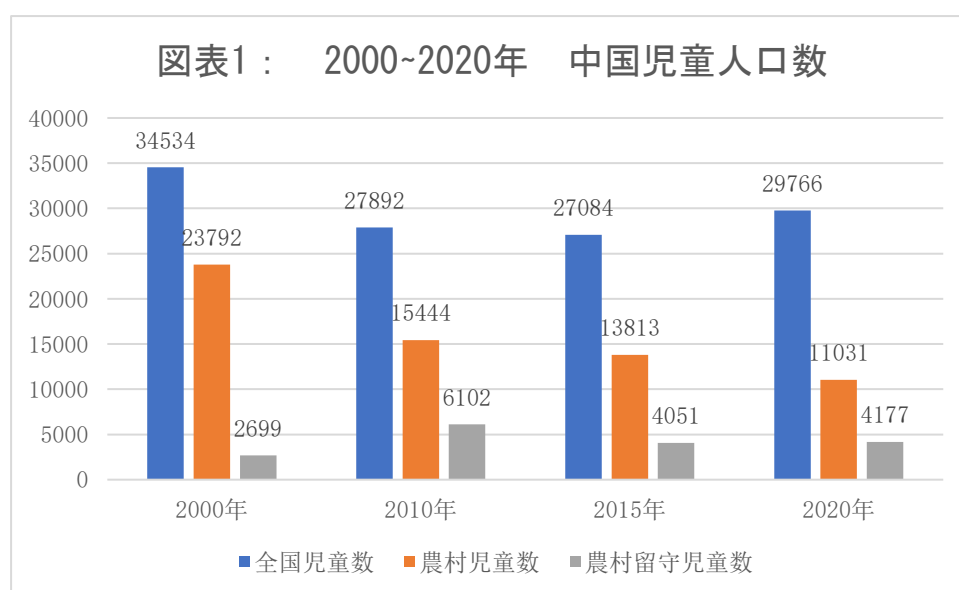
このような背景の下、多くの農民工が長距離での外出労働を選択し、家族との長期にわたる地理的分離が生じている。この分離は家庭生活の常態となり、それによって農村留守児童という特殊な集団が生まれた。農村留守児童の現象は、中国の特色ある都市化プロセスの副産物であり、その根本的な原因は、政府の都市と工業への偏重政策、それに伴う経済的動因と戸籍制度の制約にある。これにより、農民は子どもを都市に連れて行くことができず、農村に残すという選択を迫られている。

第2項 農村留守児童の全体的状況

中国の農村留守児童の現状を総合的に把握するために、彼らの人口規模、年齢層、地域的分布、居住様式及び就学状況に関する包括的な分析を行った。この分析では、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）及び国際連合人口基金（UNFPA）が共同で発表した2013年から2020年にかけての「中国の児童人口状況の事実とデータ」の調査報告書、及び中国民政部が2018年に発表した「留守児童の数は主に6歳から13歳の間集中している」の報告書、並びに段成栄・頼妙華・秦敏（2017）による「21世紀以来の中国における農村留守児童の変動傾向に関する研究」のデータを引用した。

1. 農村留守児童の人口規模

農村留守児童の人口規模は図表1で示したとおりである。2000年から2020年の間に、農村児童が全国児童総人口に占める割合は一貫して減少する傾向を示した。一方で、農村留守児童が農村児童総人口に占める割合は、逆の動向をたどっている。2000年には11.3%に過ぎなかったこの割合は、2010年までの10年間で39.5%と急速に上昇し、2015年および2020年にはそれぞれ29.3%と37.9%と高い水準を保っている。2020年において、農村留守児童の数は約4177万人に上り、全農村児童の37.9%を占めることとなり、これは農村の児童10人に対し、約4人が留守児童であるということを意味している（図表1）。



（出典：2000年のデータは、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合

人口基金（UNFPA）が発行した「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」pp.7,9に、2010年のデータは、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFPA）が発行した「中国の児童人口状況—事実とデータ 2013」pp.3,8に、2015年のデータにつきましては、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFPA）が発行した「2015年中国の児童人口状況の事実とデータ」pp.2,7,12に、2020年のデータは、国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFPA）が発行した「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」p.13に基づく。）

2. 農村留守児童の年齢層

中国民政部が2018年に発表した報告書「留守児童の数は主に6歳から13歳の間に集中している」によると、2018年の農村留守児童の年齢階層における分布状況は次のようになっている。0歳から5歳の年齢層が全体の27.1%を占め、6歳から13歳の年齢層が最も高い割合を示しており、その占有率は67.4%に達している。一方、14歳から16歳の年齢層は10.9%である。農村留守児童の主要な年齢層は6歳から13歳の間に集中しており、これは義務教育を受けるべき学齢期に位置している。

3. 農村留守児童の地域的分布

国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）および国際連合人口基金（UNFPA）が発行した「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」によると、2020年時点で、中国では8つの省における農村留守児童の数が200万人を超えており、これらの省には河南省、四川省、広西チワン族自治区、貴州省、湖南省、江西省、安徽省、広東省が含まれている。これらは主に中国の中南部に位置し、これらの省の農村留守児童の総数は2570万人に達し、全国の農村留守児童の総数の61.5%に相当する。中でも河南省は農村留守児童の数が最も多く、600万人以上にのぼることが確認されている。一部の省では、農村留守児童の割合が非常に高く、当地の農村児童の半数以上、またはほぼ半数に達している。例えば、重慶、広西、河南、貴州などがある。

4. 農村留守児童の居住様式

2000年から2015年にかけて、中国の農村留守児童の居住様式は顕著な変化を遂げた。祖父母、母親、または祖父母と母親との同居が依然として主要な居住形態であったが、その割合には変動が見られた。この期間中、母親のみと同居する割合は32.55%から14.87%へと大幅に減少し、半分以上に縮小した。父親と祖父母との同居割合は5.61%から12.92%へと増加した。また、「祖父母のみと居住する」割合は顕著に減少した。同時に、他の親戚と同居する農村留守児童の割合は顕著に増加している（図表2）。

農村留守児童の居住様式		2000年	2005年	2010年	2015年
父母一方の 外出労働	父親と留守	11.47	15.5	8.44	8.24
	父親、祖父母と留守	5.61	7.02	8.43	12.92
	母親と留守	32.55	27.71	20.33	14.87
	母親、祖父母と留守	15.48	14.54	16.06	15.88
父母両方の 外出労働	祖父母と留守	30.24	32.8	32.67	23.91
	親戚などと留守	0.07	0.35	10.7	21.29
	子ども独自留守	4.58	2.08	3.37	2.89
合計		100	100	100	100

(出典：段成栄・頼妙華・秦敏「21世紀以来の中国における農村留守児童の変動傾向に関する研究」『中国青年研究』2017年第6期，2017，p.56。

*段成栄他のデータ分析は、2000年および2010年の第5回目と第6回目の国勢調査の標本データ、及び2005年と2015年の1%人口抽出調査のデータを計算し整理した結果に基づいている。)

5. 農村留守児童の就学状況

2000年から2020年にかけて、農村児童の就学率は都市の児童に比べて継続的に低かったものの、その差は徐々に縮小し、ほぼ解消されている。また、2000年から2020年間の農村留守児童の就学率は、2020年に逆転しているものの過去に遡るほど農村児童の平均水準を上回っていた(図表3)。

分類	2000年	2010年	2015年	2020年
全国児童	86.1	91.8	93.0	92.0
都市児童	90.1	93.7	94.2	92.6
農村児童	84.4	90.3	91.9	91.1
農村留守児童	89.4	91.4	92.7	91.0

(出典：2000年、2010年、2020年のデータは、国家統計局、国際連合児童基金 (UNICEF) および国際連合人口基金 (UNFPA) が発行した「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」p.14に、2015年のデータは、国家統計局、国際連合児童基金 (UNICEF) および国際連合人口基金 (UNFPA) が発行した「2015年中国の児童人口状況の事実とデータ」pp.2, 7, 14に基づく)

第2節 「農村留守児童問題」の出現とその形成要因

中国における農村留守児童問題は、1990年代末に初めて取り上げられ、21世紀初頭より社会の各界から幅広い注目を集めるようになった(羅国芬 2018)。この問題に関して、数多くの分野の学者やメディアが広範な研究を行い、これらの研究は教育、心理学、社会学といった様々な学問領域に及び、公衆の問題認識に広範囲な影響を及ぼしている。農村留守児童に関する報道や学術討論は、彼らが直面する多くのネガティブな問題を探求することに集中している。

報道は、農村留守児童問題を深刻な問題として、継続的に社会に提示し続けている。2005年3月29日、新華社の記者周偉は、江西省盤古山鎮の9校の農村小学校に対する調査研究を報告した。この研究は、60%以上の留守児童の学業成績が不振であり、相当な割合の子どもが学習への興味を失っていることを発見した。さらに、留守児童の約60%が心理的健康問題に直面しており、その中には心理的歪みが見られる子どももいれば、暴力的傾向を示す子どももいた。研究は、これらの心理的問題が適時に矯正されない場合、これらの子どもたちが犯罪の道歩む可能性が高いと強調している。同時に、留守児童の約30%が直接に親に対する不満と憎しみを表明していた。2015年6月25日、経済日報の記者姜天驕は、中国のNGO「上学路上児童心霊関愛中心(通学路のチャイルドケアセンター)」と北京師範大学の心理学教授が共同で発表した「中国留守児童の心理状態白書」を報道した。この報告によると、全国で約1794万人の農村留守児童が1年に1回から2回しか両親に会えず、921万人の子どもが1年間両親に一度も会っていないと指摘されている。さらに、年間で両親との電話連絡が3回から4回未満の子どもが1518万人に達している。2016年

1月27日の国务院常务会议で、李克強総理は「絶対に留守児童を家庭と社会の二重の苦痛にしてはいけない」と強く指摘した。2016年2月4日、国务院は「農村留守児童におけるケアと保護の強化に関する意見」（以降「意見」と略する）を発表し、この「意見」は農村留守児童に対する愛情と保護の重要性を強調し、農村留守児童の数を徐々に減らし、彼らの安全、健康、および受教育の権利が効果的に保障されることを目指した。様々なメディアはこの「意見」の発表に対して異なる観点を表明した。2016年2月16日、「京華時報」の楊耕身は「唯一『共同生活』が留守児童を救うことができる」を発表した。楊耕身は「共同生活」の解決策を提案し、都市で働く親が子どもを連れて一緒に生活することを勧めた。2016年2月16日、「中国青年報」は「6100万以上の農村留守児童が適切に世話されることができるか」という記事を発表し、農村留守児童に対する愛情と適切な世話が切迫した課題であることを強調した。一方、2016年2月17日、「京華時報」は「中国の留守児童が6100万人に達し、両親が健全な孤児と呼ばれている」というタイトルの新聞記事を転載し、留守児童が直面している心理的および感情的な問題が物理的な貧困よりもはるかに深刻であることを強調し、社会全体の大きな問題になっているとした。メディアによる農村留守児童の人口規模及び直面している問題の深刻さに関する報道とコメントは、社会の様々な人々の関心を引いた。これらの議論は、農村留守児童の数が驚くべき現状を明らかにするだけでなく、親が外出労働することによる家族構造の変化が子どもの心理的および感情的な発達に深い影響を与えることも強調した。

同時に、学术界は農村留守児童が直面する心理健康、安全、行動表現、教育および隔世育児の問題について包括的に分析し、これらの問題の根本原因が主に親の不在とそれによって引き起こされる親子の分離、代理監護者の監護不足、および都市と農村の二元的な戸籍制度と経済的差異にあると指摘する。具体的に、農村留守児童が直面する問題は、主に愛着の欠如と家庭教育の不足の二つの側面で表れる。親が外出して働くため、子どもと長期間分離するこの状況は、子どもたちが愛着の欠如を直接感じる原因になる。親の直接の監督と教育が欠けているため、家庭教育の機能が不十分である（莫艶清 2006）。さらに、農村留守児童の大半を年配の祖父母が世話するが、これらの年長者は教育レベルが限られており、子どもの基本的な生活の世話をすることはできても、必要な学業指導を提供することは困難である。祖父母の孫への過剰な愛情はしばしば子どもの放任につながり、指導を試みる際、世代間の差異がコミュニケーションと理解の障壁になる。これらの要因が相互に作用し、農村留守児童が家庭教育の面で抱える欠陥をさらに悪化させる（范先佐・郭清揚 2015）。

農村留守児童の家族構造が子どもの発達に与える様々な不利益が明らかにされた後、一部の研究者は、より深い原因が都市と農村の二元的な戸籍制度と経済的差異にあると指摘している。この戸籍制度と経済的差異は、農村地域の貧困問題を悪化させ、同時に教育資源の不均等な分配を引き起こした。都市と農村の二元制度は、特に農村の子どもたちが教育、医療、就職などの機会を制限し、経済的差異は農村の家族がより良い教育と生活のコストを負担することを困難にしている（江立華 2013）。

第3節 「農村留守児童問題」への批判に関する先行研究

第1項 農村留守児童問題の誇大化、汚名化と脱問題化

中国の農村留守児童問題を批判的に検討する研究において、多くの学者が従来の研究とは異なる見解と発見を提示している。羅静他（2009）は中国の農村留守児童に関する研究文献を体系的にまとめ、大多数の研究が農村留守児童を問題児童として定義し、しばしばこのグループを偏見をもって研究・分析していることを発見した。また、任運昌（2008）

の研究では、4年間にわたり中国西部の10省と46の県の農村を深く掘り下げ、500回以上のフィールド調査を行った。彼は、これらの調査で、一部の回答者が全般的に留守児童を問題視しており、社会各界からのこれらの子どもたちの質の評価も一般的に低いことを発見した。彼はまた、関連する学術論文の約四分の一（約400論文）が農村留守児童のネガティブな特徴を誇張している傾向にあると指摘し、農村留守児童を問題児童と見なすことが彼らの汚名化につながる可能性があることを強調した。したがって、社会や学界にこのような汚名化を避け、農村留守児童に対するより客観的な視点を持つよう呼びかけている。

江立華（2011）の研究では、現在の農村留守児童に関する研究がしばしば農村留守児童への「同情と道徳的配慮」の影響を受けていると問題提起している。この傾向は、農村留守児童問題の過剰強調につながっている。彼は、農村留守児童問題を研究する際には、より厳格な科学的態度に基づいて公正かつ偏りのない事実研究と因果分析を行うべきであると強調している。江は、研究過程で科学的規範と実際の研究発見を厳守し、価値中立の原則を堅持することを主張している。

全体として、これらの研究は、学界が農村留守児童問題を理解し対処する際の視点に問題があることを指摘している。彼らの研究は、このグループに対する異なる理解と評価だけでなく、この社会問題を研究する際に科学的客観性と価値中立性を保持する重要性を強調している。

第2項 先行研究に対する考察

農村留守児童問題に関する議論を検討した結果、一般的には報道や研究の多数派は農村留守児童を深刻な問題として取り扱っているが、一部の研究者は農村留守児童の肯定的な側面や潜在的な長所を探求しようと試みていることが明らかになった。大多数の研究では、農村留守児童と非留守児童の各方面での表現を比較し、農村留守児童が非留守児童よりも優れているか、劣っているか、または同じであるかという、複雑な個人差を「長所と短所」の比較に単純化している。このアプローチでは、農村留守児童問題の背後にあるより多くの社会的、経済的、家庭環境の要因を見落とす可能性がある。また、農村留守児童の諸問題を明らかにする多数の研究に比べて、留守児童問題に対する客観的且つ反省的な研究は相対的に少ない。現在の農村留守児童に関する研究方法が厳密な科学的態度を十分に反映しているかを検証し、これらの研究の客観性について探求を行うことが重要であると考えられる。

第2章 隔世育児の農村留守児童への影響に関する研究

本章では、文献調査から隔世育児の農村留守児童への影響がどのように議論されているかを明らかにする。本研究の文献調査では、その目的を以下の3点においた。

1. 隔世育児が農村留守児童にはどのような影響を及ぼすとされているのかを明らかにし、隔世育児が及ぼす農村留守児童への影響は肯定的か、否定的か判断する。
2. 研究者が選択した研究対象、実施方法、調査ツール、調査サンプルに関して検討することで、結論が客観性を持つかどうかを推測する。基本的概念、基礎的な測定方法が結論にはどのように影響するかを探る。
3. 農村留守児童問題が通常考えられている祖父母の養育スタイルに起因するか否かを探求する。

第1節 文献の採択基準と検索方法

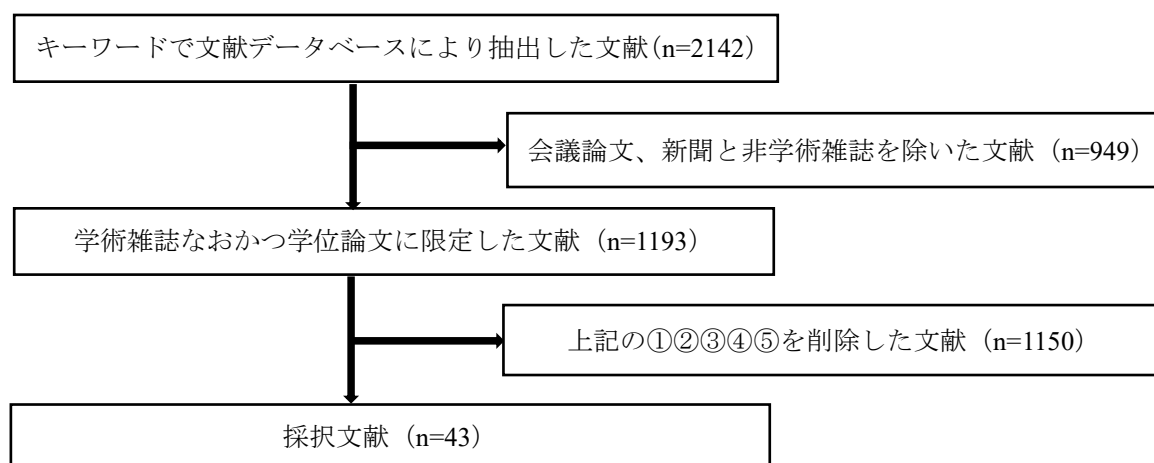
文献の採択基準は、隔世育児が農村留守児童への影響に関する内容を扱っているものである。

文献検索は2023年10月~12月に実施した。文献データベース：中国学術情報データベース（CNKI：China National Knowledge Infrastructure）は、中国の総合的な学術情報データベースで、学術雑誌、重要新聞、博士・学位論文、重要学術会議論文などの各種データベースを収録している。本研究の対象文献は中国知網（CNKI）から検索した。対象期間は限定しなかった。

検索に用いたキーワードは、「隔代育児」、「隔代教育」、「隔代教養」、「隔代抚育」、「隔代抚养」、「隔代照顾」、「隔代照料」、「祖辈照料」と「留守儿童」、「农村留守儿童」「留守儿童问题」などであった。

第2節 文献選定のプロセス

文献選定のプロセスは図表4に示す通りである。まず、上記のキーワードで文献データベースにより2310編の文献が抽出された。次に、会議論文、新聞と非学術雑誌を除き、学術雑誌なおかつ学位論文に限定した後、1252編の文献が抽出された。そして、①研究テーマと関係ない文献（例えば世代間衝突、祖父母の退職後の生活に関連するもの）、②外国の祖父母の子育て、③重複文献、④都市部における隔世育児、⑤農村児童の隔世育児に焦点を当てた研究でありながら、農村留守児童に関する言及がない論文、を削除した。



図表4： 対象文献選定のフローチャート

その結果、最終的に 43 編の文献が対象文献として選定された。

第 3 節 文献整理の方法

第 1 段階として、選定された基本情報の整理を行う。文献名（著者・発表年）、研究課題及び研究目的、研究対象、対象者数、調査対象地域、研究方法、研究結果、研究上の不十分点などについてエクセルシートを用いて整理する。

第 2 段階では、文献に基づき、調査対象、対象者数、調査対象地域の特徴について分類して整理する。また、研究結果により隔世育児が及ぼす農村留守児童への影響とは何か、どんな影響があるのか、それらの影響は肯定的か、否定的か分類して整理する。

第 3 段階では、研究上の不十分点をまとめて、「何が」、「なぜ」、「どのように」問題とされているのか分類して整理する。

第 4 節 文献概観とその分析結果

これら 43 編の論文分析において、2 編は全国的な農村地域を対象とし、40 編は特定の県の農村地域に焦点を当てており、1 編は研究地域の具体的な情報を記載していない。研究手法に関して、29 編は定量的手法を採用し、6 編は定性的手法を採用し、残る 8 編は両手法を組み合わせている。定量的手法を採用した 37 編のうち、2 編は具体的なサンプル情報の提供がなく、12 編はサンプル数が 200 未満、6 編は 200 から 500 の間、8 編は 500 から 1000 の間、9 編は 1000 から 6000 の範囲内のサンプル数である。

これら 43 編の論文において、研究の焦点は心理的健康、身体的健康、社会行動と規範、そして教育と認知発達の四つの領域に集中している。教育と認知発達の領域（家庭教育、科学的リテラシー、学校での表現、道徳教育など）に関する論文が最も多く、計 16 編ある。農村留守児童の心理的健康問題（犯罪率、孤独感、主観的幸福感、抑うつ、情緒問題、自己効力感などを含む）に関する論文が 12 編である。社会行動と規範の面（例えば社会化、行動習慣、人間関係など）に関する論文は、11 編ある。その他の 4 編は、農村留守児童の身体的健康状態（身体損傷、肥満、身体健康、母乳および離乳食の摂取状況）に焦点を当てている。

43 編の論文における結論を統計した結果、隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響を「否定的」（34 編）、「肯定的」（3 編）、「中立的」（6 編）の三つのカテゴリーに分類した。

第 1 項 否定的な影響（34 編）

第一のカテゴリーに属する 34 編は、隔世育児が農村留守児童に否定的な影響を与えることを主張している。具体的には、4 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の身体的健康に悪影響を与えることを明確に示している。また、8 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の心理的健康に悪影響を与えると指摘している。さらに、7 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の社会行動と規範にも悪影響を与えると述べている。加えて、15 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の教育と認知発達にも悪影響を及ぼしていることを指摘している。

1. 身体的健康（4 編）

4 編の論文では、隔世育児が農村留守児童の身体的健康（身体損傷、肥満、母乳および離乳食の摂取状況）に悪影響を与えることを明確に示している（霍紅他 2023；許双会他 2022；劉貝貝他 2019；謝芳・楊齊 2015）。

霍紅他（2023）による研究では、甘肅省平涼市の 3 つの郷鎮に所在する 9 校の小学校、4 年生から 6 年生までの生徒 3,769 名を対象に調査が実施された。対象者には、非留守小

学生 2,631 名、留守小学生 1,138 名が含まれており、留守小学生の中で、668 名が片親によって、364 名が祖父母によって、23 名が同世代によって、83 名がその他の保護者によって監護されていた。本研究で用いられたのは、研究者自身によって設計された身体損傷に関する調査用アンケートで、性別、学年、一人っ子か否か、母親の教育水準等の一般情報、家庭環境、身体損傷、性格タイプ、及び心理状態という 5 つの項目が含まれていた。研究結果は、非留守小学生の身体損傷の発見率が農村の留守小学生よりも 19.1%低いことを明らかにした。さらに、留守小学生の中では、祖父母の監護下にある児童の身体損傷の発見率が、片親の監護下にある児童よりも 43.3%高かったことが報告されている。

許双会他 (2022) は浙江省天台県の農村地域にある 20 の幼稚園について研究を行い、祖父母が主に養育している農村の留守学齡前児童 1,498 名を調査対象として選定した。調査内容には、児童の基本情報、出生時の体重、祖父母が肥満かどうか、祖父母の教育レベル、食事の速度、高カロリー食品の摂取状況、果物や野菜の摂取状況、及び養育者が積極的に食事管理情報を得ようとする態度などが含まれていた。研究結果では、農村地域で祖父母によって養育されている学齡前の留守児童の中で、肥満の発生率が高いことが明らかにされた。この現象は祖父母の低い教育レベルと科学的な食事管理の観念の欠如と関連しており、学齡前児童の肥満を引き起こす可能性があると考えられた。

劉貝貝他 (2019) は湖北省の農村留守児童 1,125 名とその祖父母を対象にアンケート調査を行った。調査項目には、家庭の基本状況、祖父母の育児方法、祖父母の農村留守児童への影響力、およびこれらの児童の不健康な食物消費行動が含まれていた。研究では回帰分析と *Bootstrapping* の方法を用い、祖父母の甘やかし型育児方法と農村留守児童の身体健康状態との関係およびその潜在的な影響メカニズムを探求することを目的としていた。研究結果から、祖父母の甘やかしの度合いが農村留守児童の不健康な食物消費行動を促進し、それが彼らの身体健康状態に不利な影響を与えることが示された。

謝芳・楊齊 (2015) は四川省綿陽地域の 0 歳から 6 歳までの農村留守児童 38 名の保護者 (うち 35 名が祖父母、3 名が親戚) を対象にアンケート調査を行った。この研究では、「学齡前の農村留守児童生活品質調査アンケート」という自作のアンケートを用い、母乳及び補助食品の摂取状況、親子関係、幼児教育の 3 つの側面からこれらの児童の生活の質を評価した。研究結果から、祖父母の教育レベルが一般に低く、母乳給与の利点や補助食品を早期に摂取する潜在的なリスクに対する認識が不足していることが明らかになった。これは、低い母乳給与率や魚、エビ、豆製品の摂取が少ないことに具体的に表れている。

2. 心理的健康 (8 編)

8 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の心理的健康に悪影響を与えると提起しているが、各研究の焦点は異なる。具体的に、そのうちの 1 編の論文では、農村留守児童の主観的幸福感を特に測定している (馮露霜・陳麗 2019)。別の論文では農村留守児童の孤独感の評価に焦点を当てている (韓志紅・郭智慧 2016)。また、農村留守児童の犯罪率に関する実証的研究を行っている (董士曇・李梅 2010)。残りの 5 編の論文は、農村留守児童の心理的健康状態をより広い視点から分析しており、心理的健康の具体的な側面には細分化して研究していない (樊翠娟 2010 ; 黄艷萃・李玲 2012 ; 王偉他 2014 ; 謝琴紅他 2011 ; 高亞兵 2008)。

農村留守児童の主観的幸福感に関する研究では、留守児童であるかどうかではなく、留守児童内で父母の養育を受けているかどうかの主観的幸福感に影響を与えていることが明らかになった。馮露霜・陳麗 (2019) は、重慶市彭水県のある小学校の 3 年生から 6 年生までの生徒 351 名を調査対象とした。その中には、農村留守児童が 278 名、非留守児童

が 73 名含まれており、農村留守児童の中では、父親による養育が 25 名、母親による養育が 134 名、主に祖父母による養育（父母の一方も育児に関与する場合あり）が 98 名、親戚による養育が 21 名であった。研究ではオックスフォード幸福度アンケートを使用し、SPSS 24.0 ソフトウェア及び Excel 2010 でデータ処理と分析を行った。研究結果から、農村留守児童と非留守児童の主観的幸福感にはある程度の差が存在するが、その差は顕著ではないことが明らかにされた。農村留守児童の中では、父母の一方による養育を受けた児童の主観的幸福感が、隔世養育を受けた児童よりも明らかに高かった。

農村留守児童の孤独感に関しては、留守児童の孤独感が高く、心理的健康状態が低いことが明らかにされた。韓志紅・郭智慧（2016）は陝西省宝鶏市の 15 の郷鎮の中小学校の農村児童 618 名を調査対象とし、その中で農村留守児童は 404 名（祖父母のみによる養育の児童は 100 名、父母の一方と祖父母による共同養育の児童は 304 名）、非留守児童は 214 名（父母の両方による養育）であった。研究の目的は、これら 3 つの養育タイプ下の児童の孤独感と心理的健康にどのような差異があるかを分析することである。研究では、自作の農村児童調査アンケート、児童孤独感尺度、中学生心理健康尺度を使用し、SPSS 16.0 ソフトウェアを用いてデータ分析を行い、t 検定、 χ^2 検定、分散分析の統計手法を適用した。研究結果から、祖父母のみによる養育の農村留守児童は、共同養育や父母による養育を受けている農村児童に比べて、孤独感の発生率が高く、心理的健康問題がより深刻であることが示された。特に、中学段階での隔世育児を受けている農村留守児童の中で、これらの問題は特に顕著であった。

農村留守児童の犯罪率は非留守児童と比べ約 11 ポイント高く、およそ 1 割強の犯罪率であることが報告されている。董士曇・李梅（2010）は山東省の 8 つの小学校と 8 つの中学校から、500 名の農村留守児童と 500 名の非留守児童を調査対象として選んだ。これら農村留守児童の中で、332 名は片親による監護下にあり、129 名は祖父母による監護下にあり、15 名は他の年長者による監護下にあり、12 名は同世代による監護下にあり、8 名は自己監護を行っており、さらに 4 名は他の監護者による監護下にあった。この研究は、農村留守児童の犯罪率が 12.54% に達し、非留守児童よりも約 11 ポイント高いことを発見した。特に隔世育児の家庭においては、家庭の教育機能が基本的に喪失していることが、農村留守児童の高い犯罪率の主要な原因とされている。

心理的健康状態を広範に研究した研究群からは、農村留守児童の中でも祖父母のみが養育する場合に心理的健康状態が低いことが報告されている。具体的には、対人不安や対人恐怖などの傾向が共通して報告され、学習不安、過敏傾向、身体症状、衝動傾向などの問題を示すとした研究も存在する。

樊翠娟（2010）は甘肅、河南、安徽、四川の 4 省から 5,108 名の農村留守児童を対象に分類し、その留守状況に基づいて、母親看護、父親看護、隔代看護、叔父母看護、自己看護、同世代看護の 6 つのカテゴリーに分けた。この研究は、異なる監護タイプ下の農村留守児童の心理的健康状態の差異を比較することを目的としている。研究では、「心理健康診断テスト（MHT-RC）」尺度を使用した。この尺度は学習不安、対人不安、孤独傾向、自責傾向、過敏傾向、身体症状、恐怖傾向、衝動傾向の 8 つの内容尺度と 1 つの効度尺度を含む。研究では SPSS13.0 ソフトウェアを用いて MHT のデータ分析を行った。研究結果から、他の看護タイプと比較して、祖父母による看護を受けている農村留守児童は、対人不安と恐怖体験の面でより顕著な結果を示している。

黄艶萃・李玲（2012）は江西省の 4 地域から 813 名の農村児童を調査対象として選び、その中には 570 名の農村留守児童（母親監護、父親監護、隔代監護、同輩と自己監護に分けられる）、110 名の元留守児童、133 名の非留守児童が含まれていた。研究では、親の育

児方法に関するアンケートと心理健康診断アンケートを用い、農村家庭の育児方法が留守児童の心理的健康にどのように影響するかを探究することを目的としていた。研究結果から、元留守児童や非留守児童と比較して、農村留守児童は心理的健康の面で劣っており、主に学習不安、対人不安、過敏傾向、身体症状、恐怖傾向、衝動傾向などの面でその傾向が顕著であることが明らかになった。この状況は、祖父母が通常採用している過保護と溺愛型の育児方式、及び罰に対する拒絶と直接的な関連があるとされた。

残りの 3 編の論文では、研究者たちは農村留守児童と非留守児童の心理健康状態を比較分析している。研究結果は一貫して、非留守児童の心理的健康水準が農村留守児童よりも顕著に高いことを示している。さらに、農村留守児童の中で、隔世育児の下にある農村留守児童は、片親監護の下にある農村留守児童と比べて、心理的健康状態がより悪いと報告されている（王偉他 2014；謝琴紅他 2011；高亜兵 2008）。

3. 社会行動と規範（7 編）

社会行動と規範の面で、7 編の論文で隔世育児が農村留守児童に悪影響を及ぼしていると考えている。具体的には、1 編の論文では隔世育児が農村留守児童の人間関係に不利な影響を与えていると指摘している（程琳 2017）。別の 1 編の論文では、隔世育児が彼らの行動習慣に悪影響を及ぼしていると考えられている（任潤 2013）。残りの 5 編の論文は、隔世育児が農村留守児童の社会的発達に不利益を与える経路に焦点を当てている（張小屏 2018；侯曼他 2019；汪采玉・賈勇宏 2022；周国雷 2014；孫羽燕 2014）。不利益を与える分野に関しては研究によって違いが認められる。ただし、生活の自立や生活習慣に関しては、農村留守児童は非留守児童に劣らないか、あるいは優れていることも報告されている。

程琳（2017）は吉林省松原市宁江区孫喜村の小学 1 年生から 6 年生までの 7 歳から 13 歳の小学生 90 名を調査対象とし、隔世育児モデル下の農村留守児童（64 人）と非隔世育児モデル下の非留守児童（26 人）を比較し、これら 2 グループの小学生の人間関係の違いを分析・比較した。この研究は、「隔世育児モデル」を独立変数とし、社会的能力、社会的不安、人間関係、社会適応を従属変数として、児童行動チェックリストと児童社交不安尺度を使用した。結果は、非隔世育児モデル下の非留守児童と比較して、隔世育児モデル下の農村留守児童は問題処理能力が弱く、社会的不安が顕著で、心理的問題の検出率が高く、他人と積極的に関わろうとする意欲が弱く、人間関係能力が弱く、社会適応能力が低いことが示された。しかし、生活自立能力の面では、2 つのタイプの学童の間に顕著な差は見られなかった。

任潤（2013）は湖南省岳陽市のある郷村の小学生 194 名を対象にアンケート調査を行い、祖父母による養育を受ける農村留守児童（合計 114 名）と父母による養育を受ける非留守児童（合計 80 名）の行動習慣の違いを比較し、そのうちの 5 名の祖父母養育の農村留守児童と 4 名の父母養育の非留守児童に対して深い面接を行った。この研究では、収集したデータに対して SPSS ソフトウェアを用いて詳細な分析を行った。研究結果から、学習習慣の面では、祖父母養育者の文化レベルが低く、養育観念及び方法が伝統的で時代遅れであることが、隔世育児の農村留守児童が父母養育の非留守児童よりも学習習慣が劣る主要な原因となっている。対人コミュニケーション能力に関しては、隔世育児の農村留守児童はより受動的で、主動性が低いことが見られた。しかし、生活習慣の面では、2 つのグループの児童の間で生活自立能力や衛生習慣に顕著な差はないものの、家事を処理する能力において、隔世育児の農村留守児童は非隔世育児の非留守児童を明らかに上回った。全体としては、行動習慣において隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響は負のものであると総括されている。

張小屏 (2018) は貴州省の 5 つの県の郷鎮で 847 名の農村留守児童を対象に調査を行い、片親監護 (523 人)、隔代監護 (172 人)、混合監護 (152 人) の 3 つの異なるタイプでの農村留守児童の社会化発達の違いを比較した。この研究では、アンケートを通じて児童の基本情報とその社会化に関する詳細情報を収集した。後者は、生活スキル、人間関係構築能力、生活目標、価値観、自己認識、社会的行動の 6 つの側面をカバーしている。研究結果から、片親監護下にある留守児童は社会化発達の面で最も良好な成果を示し、比較的少ない社会的問題に直面していることが明らかになった。一方、隔世育児下の留守児童は社会的問題がより顕著であり、これらの問題は主に生活スキルの弱さによる社会適応障害、感情の欠如が引き起こす心理的問題、自己制御能力の弱さが原因の社会的行動の乱れ、および価値観と自己認識の偏りによって表れているとされた。

侯曼他 (2019) は陝西省宝鶏市太白県の 5 つの鎮で 197 名の児童を対象にアンケート調査を行い、調査に参加した児童を隔世育児児童 (99 人、祖父母+子と祖父母+片親+子) と非隔世育児児童 (98 人、両親+子) の 2 グループに分け、これら 2 つの異なる監護タイプ下での農村留守児童の社会化発達の違いを比較分析し、太白県の農村留守児童の社会化に影響を与える主要因子を探究した。この研究は隔世育児を独立変数とし、農村留守児童の社会化程度を従属変数として、社会スキル、道徳的資質、行動特性、自己認識、および学習状況の 5 つの主要な側面を含み、収集されたデータに対して記述統計分析と独立標本 t 検定を行った。研究結果は、2 グループの児童の自己認識と学業成績において顕著な差が存在することを示し、一方で労働技能、社会的交流、道徳的資質においては顕著な差が見られなかった。研究はさらに、祖父母による学業指導の不足が農村留守児童の学業成績が低い主要な原因であることを指摘した。さらに、父母不在でケアの欠如、人間関係での積極性と主体性の不足、祖父母との間での平等な交流の概念と意識の欠如が、農村留守児童が自己認識において自信を欠く三つの主要な理由であると述べている。

汪采玉・賈勇宏 (2022) は、中国教育追跡調査 (CEPS) の基礎データを基に、中学段階で祖父母に監護される農村留守児童と父母に監護される非留守児童の社会化過程の違いを探究することを目的としている。この研究では、「中学在籍生が隔世育児を受けているかどうか」を独立変数とし、人間関係構築能力、感情管理、価値規範、自己期待の 4 つの社会化を従属変数として設定し、一人っ子かどうか、寄宿しているか、家庭の経済状況、親子関係、同輩の影響や教師からのサポートなどの変数をコントロールに入れた。SPSS23.0 ソフトウェアを用いてデータの統計分析を行い、多変量線形回帰モデルを使用して分析を実施した。その結果、父母に監護される農村児童と比較して、祖父母に監護される農村留守児童は人間関係構築能力に劣り、感情の安定性と自己調節能力に欠けていることが明らかになった。一方、価値規範の社会化と自己期待の社会化の面では、2 つのグループ間に顕著な差は見られなかった。

周国雷 (2014) の研究は、吉林省德恵市朱城子鎮の 110 世帯の家庭 (農村留守児童のみ) を対象に行われ、これらの家庭の農村留守児童は祖父母によって養育されている。研究の目的は、隔世育児が農村留守児童の社会的発達に及ぼす影響を探究することだった。研究結果は、祖父母による養育の農村留守児童は、生活自立能力、人間関係構築能力、効果的なコミュニケーションスキルの面で成績が良くないことを示している。

孫羽燕 (2014) は江西省南昌市岡上鎮の 18 の隔世育児家庭を対象にインタビューを行い、またこの学校の校長に対するインタビューを通じて、隔世育児モデルが農村留守児童の社会化に与える影響を探究した。研究結果では、祖父母の多くが教育水準が低く、農村留守児童の養育過程で科学的な教育方法に欠け、主に長年にわたる生活経験に依存していることが明らかになった。この状況の下で、農村留守児童は言語社会スキルの習得におい

て不十分であり、正しい行動規範の意識を形成できず、人格発達において欠陥が存在する。さらに、祖父母の過度な甘やかしは農村留守児童が自立性において劣る結果をもたらしていると考えられる。

4. 教育と認知発達 (15 編)

15 編の論文が、隔世育児が農村留守児童の教育と認知発達に不利な影響を与えることを指摘している。具体的には、1 編の論文では、農村留守児童の科学的リテラシーの不足の要因を隔世育児に求めるものがある (劉宏雁 2011)。別の 1 編の論文では、家庭教育の支援が農村留守児童の学校での表現に与える影響を探究し、祖父母による学習指導の時間と能力が農村留守児童の学習習慣と学習への積極性との関連性から見て、隔世育児の否定的影響が明らかであることを発見した (于佳琪 2023)。また、1 編の論文では、隔世育児が農村留守児童の道徳教育に悪影響を与えていることを示している。(劉芳 2018 年)。その他、家庭教育の面で隔世育児が農村留守児童に与える不利な影響について述べている 12 編の論文もある (秦敏 2015; 張晶晶他 2015; 沙莎・苗春鳳 2023; 袁鳳琴・袁真強 2010; 陸叶 2010; 紀紅娟 2012; 孫一葦 2013; 王自坤 2016; 周考 2016; 肖悦他 2020; 韋婷婷 2021; 鮑一帆 2022)。多くの研究で学業成績面の問題や学業への祖父母の支援不足やコミュニケーションの不足が指摘され、農村留守児童の消極性が問題とされた。一方で、秦敏 (2015) は成績の低い農村留守児童に対する教師の差別的扱いや貧困が教育に影響することも指摘している。

劉宏雁 (2011) の研究は、重慶市万州区太安鎮の 241 名の農村留守児童 (片親監護、隔代監護、同代監護、親戚監護に分かれる) と 126 名の非留守児童を対象に比較分析を行い、両グループ間の科学的リテラシーの違いとその原因を評価した。アンケート調査は、個人の基本情報と情報技術、農業知識、天文学、生命科学、環境科学などの分野の問題、科学的行動と習慣、科学的精神、態度、価値観をカバーした。研究結果から、農業の知識と天文学の知識においては、2 グループ間の差は顕著ではなかった。しかし、環境科学と生命科学の分野では、農村留守児童の知識が非留守児童に比べて明らかに劣っていた。情報技術の分野では、留守児童がインターネットカフェでインターネットを利用して関連知識を得ているため、より良い理解を示したが、非留守児童は父母によるインターネット使用時間の制限を受けていた。科学的行動の習慣に関しては、農村留守児童は宿題の完成状況、学習成績、衛生習慣、生活リズム、遊び行動、人間関係の構築などの面で劣っていた。科学的精神、態度、価値観においても、農村留守児童は不足しており、例えば嘘をつく、教師を尊重しない、公共物を故意に破壊する、賭け事をする、封建的な迷信活動に参加するなどの行為があった。研究はさらに、農村留守児童の科学的リテラシーが低い原因を分析し、祖父母の保守的な思考、革新的な能力の欠如、甘やかし、適切な指導の欠如、育成を重視しつつ教育を軽視する態度、そして彼ら自身の低い教育レベルが、農村留守児童の学習を効果的に指導できない要因であることを指摘した。

于佳琪 (2023) は、2020 年の中国家庭追跡調査 (CEPS) データを利用して、全国の複数の省市からの 861 名の農村留守児童に対する分類研究を行った。これらの児童は、母親 (363 名)、父親 (53 名)、祖父母 (307 名) による監護、または自己監護 (138 名) に分けられ、異なる監護タイプ下での家庭教育支援が農村留守児童の学校での表現に与える影響を評価することを目的としていた。研究では、家庭教育支援を教育主体、教育態度、教育投入の 3 つの次元に細分化し、児童の学校での表現を学業成績と日常行動の 2 つの側面に分類した。研究結果から、家庭教育支援が農村留守児童の学校での表現と密接に関連していることが示される。具体的には、母親が教育主体である農村留守家庭では、母親に

よる監護を受ける児童が効果的な親子コミュニケーションと積極的な育児行動（例えば、学習指導）の恩恵を受け、正しい学習観を確立し、高い学業成績を達成している。しかし、祖父母主導の家庭教育では、教育に対する積極的な態度と能動的なコミュニケーションがあるにもかかわらず、家庭の教育投入が不十分で、例えば、祖父母の低い教育レベルが学業指導の能力に限界を与える。この限界は、農村留守児童が学習習慣と学業成績を十分に伸ばすことができず、それが不適切な行動やさらには問題行動へと繋がる原因となることにつながるとされた。さらに、世代間のコミュニケーション障壁が衝突を引き起こす可能性があることが指摘された。これらの要因から、隔世育児が農村留守児童の学校での表現に与える否定的影響は顕著であると報告している。

劉芳（2018）は四川省巴中市の管轄県にある1つの完全隔世育児家庭（家族構成は祖父母と孫）を調査対象とした。この家庭に対する個別インタビューを通じて、隔世育児される児童の道德教育の現状と問題点を分析することを目的としていた。研究結果から、父母が児童の道德行動の最も重要な模範であり、彼らが外出して働くことで不在が、農村留守児童が日常生活で道德を観察し模倣する機会を減少させていることが明らかになった。さらに、祖父母が児童の道德教育を実施する過程で困難に直面しており、これは主に彼ら自身の素養の限界と児童道德教育の重要性に対する認識不足によるものであるとされた。祖父母から伝えられる道德教育の内容は、学校の主流道德教育と顕著な差異があり、教育方法が伝統的で硬直的である。これに加え、農村社会の要因が児童の道德発達に不利であり、コミュニティが道德教育の役割を効果的に果たせていないことも指摘された。これらの要因がすべて、農村留守児童の道德的発達を妨げているとしている。

秦敏（2015）は陝北農村地域の360世帯の隔世育児家庭における農村留守児童及びその祖父母に対して調査を行い、陝北農村留守児童の隔世育児の現状とその効率の低さの原因を探究することを目的としていた。研究結果から、祖父母の低い教育水準と科学的な教育理念の欠如が、不利な家庭学習環境を生み出し、子どもが教師を恐れるようになり、さらには成績が低い農村留守児童に対する教師の差別が学校教育の欠如を引き起こしていることが明らかになった。加えて、農村留守児童は学習に対する自信と積極性を欠いており、貧困は生活の苦難を悪化させ、祖父母の甘やかしと放任の態度は児童の安全問題に対する効果的な監督を弱めたとしている。同時に、児童の人格と心理的発達への必要な注意が欠けており、これらの側面での違いを引き起こしていることが報告された。

鮑一帆（2022）は江蘇省宿遷市のある村の108名の隔世育児家庭の祖父母を調査対象とし、その村の隔世育児の問題とその成因を分析した。研究結果から、祖父母監護者は一般的に低い個人の素養と教育水準を持つため、孫への学業指導において有効な支援を提供することが困難であり、これがさらに農村留守児童の学習への関心の低下と授業でのパフォーマンスの不振につながっていることが明らかであるとした。さらに、祖父母がもつ伝統的な観念と非科学的な育児方法が、子どもたちに封建的で後進的な思想を伝えているとしている。同時に、ほとんどの祖父母は孫の感情状態、学習状況、人間関係を理解することが不足しており、世代間のコミュニケーションの障壁を引き起こし、時にはこの隔たりが農村留守児童にさらなる感情的な損傷をもたらしているとする。一方で、父母の不在と祖父母の過度な甘やかしにより、農村留守児童は見栄を張る心や享楽の態度を容易に形成し、積極的で向上心のある人生観と価値観を欠くと報告した。ほとんどの子どもたちの理想は外出して働くことや経営者になることであり、軍人、教師、医者などの積極的な職業を選択する子どもは少なかった。

張晶晶他（2015）による研究は、山東省の2つの県から735例の学齢前児童の保護者を対象に行われ、その中に農村留守児童の保護者269人（片親監護125人、隔代監護144

人)、非留守児童の保護者 466 人が含まれており、山東省の農村留守学齢前児童の家庭での育児状況について理解することを目的とした。この研究では、独自に設計された調査票を使用し、学齢前児童及びその家族の基本情報、児童の保護者による育児状況、留守および非留守児童の保護者が日常的に子どもに対して取る行動、留守児童の異なるタイプの保護者が日常的に子どもに対して取る行動などを主に調査した。研究結果から、50%以上の農村留守児童の保護者が子育てをエネルギー不足と重い負担と感じていることが明らかになった。留守および非留守児童の保護者が日常的に子どもに対して取る行動には統計学的な差異があり、具体的には、農村留守児童の保護者は非留守児童の保護者に比べて、日常的に子どもとのコミュニケーションが不足しており、子どもの感情や心理に対する配慮が少なく、子どもの生活習慣の育成を無視しているとする。農村留守児童の異なるタイプの保護者が日常的に子どもに対して取る行動にも統計学的に意味のある差異があり、片親監護と比較して、隔世育児下の祖父母は、子どもの就寝時間の管理や子どもが悲しんでいる時にその感情を分析する能力が相対的に弱いことが示された。この差異は主に、祖父母が採用する甘やかしと保護的な育児スタイルが子どものわがままや気まぐれを容易に育て上げることに起因しているとされた。さらに、現代の農村高齢者が一般に持つ低い教育水準が子どもの教育に対する適切な指導の不足につながり、彼らの精力や体力の限界、および孫世代との世代間のコミュニケーション障壁により、子どもの感情や考えへの注意が不足しており、それが一連の教育問題を引き起こす可能性があることが示された。

沙莎・苗春鳳 (2023) は江蘇省南通市 A 村の留守児童に対して行った研究で、調査対象は留守児童 58 名 (その中で 31 名は祖父母が監護、15 名は片親が監護、7 名はその他の親戚が監護、5 名はその他の監護形態) と非留守児童 34 名を含み、農村留守児童が隔世育児中に直面する問題を探求することを目的とした。研究結果から、農村留守児童が隔世育児中に遭遇する主要な問題には、教育方法の単一性、養育に重点を置き教育を軽視すること、監護人が直面する大きなプレッシャーがあることが指摘された。さらには留守児童が学校嫌い、ネット依存、安全リスク、感情的ニーズが満たされないなどの問題が含まれていることが明らかとなった。これらの問題は主に、隔世育児を行う祖父母の教育能力不足、およびコミュニティ、学校、政策レベルでのサポートが不足していることなどに起因しているとされた。

周考 (2016) による研究は、四川省のある県の 2 つの小学校で 428 名の児童を対象に行われ、これらの児童を隔世育児モデル (祖父母のみによる養育の農村留守児童 179 名) と非隔世育児モデル (祖父母と片親によって共同養育される 21 名の農村留守児童、親戚養育下の 16 名の農村留守児童、自己養育 6 名、父母の両方による養育 206 名の農村児童) に分け、学習、行動習慣、心理状態の 3 つの側面で、隔世育児と非隔世育児の子どもたちの差異を探求することを目的とした。研究結果から、学習監督においては、2 つの養育モデルの保護者間に顕著な差異は認められなかった。しかし、学習サポートの提供に関しては、隔世育児の祖父母が非隔世育児の保護者に比べてより大きな能力不足を示し、これが隔世育児された子どもたちが学習の主体性と規律性において非隔世育児の子どもたちよりも劣る結果につながったとされた。行動習慣の側面では、2 つのグループの子どもたちの独立して行動する能力と衛生習慣には顕著な差異がなかった。心理状態に関しては、隔世育児の子どもたちは非隔世育児の子どもたちと比較して、より孤独感を感じやすく、人間関係において消極的で受動的な振る舞いが見られる傾向があった。

紀紅娟 (2012) は安徽省九華山風景区九華郷の 82 名の農村留守児童を対象に、彼らの教育問題を探求する調査を行った。研究の結果、ほとんどの農村留守児童は、親の愛情とケアを欠き、これが彼らの心理的障害を引き起こす容易な要因となることが明らかになっ

た。また、隔世育児の問題が顕著で、祖父母による孫への過度な甘やかしや、祖父母が学業指導能力に欠くことが、農村留守児童の学習意欲の低さや学業成績の悪さにつながることを示された。

残りの6編の論文では、農村留守児童を調査対象とし、監護タイプを隔代監護、片親監護、同輩監護、親戚監護などの異なるタイプに分類し、これらの監護タイプ下で農村留守児童の家庭教育が直面する問題とその原因を分析した。研究結果から、祖父母監護者の低い教育水準は、農村留守児童への学習指導能力に制約を与え、これらの児童が低い学習自発性と興味を示し、時には学校嫌いや登校拒否の状況さえも引き起こす原因となっていることが明らかになった。さらに、祖父母監護者のこのような教育能力の不足は、彼らが育児において養育を重視し教育を軽視する傾向をもつことにもつながっているとしている（袁鳳琴・袁真強 2010；陸叶 2010；孫一葦 2013；王自坤 2016；肖悦他 2020；韋婷婷 2021）。加えて、祖父母の現代的な教育観念や科学的な教育方法の欠如、および加齢に伴う体力と精力の限界は、祖父母が孫の家庭教育責任を効果的に果たすことが困難であること、また、思想観念の面で孫と効果的にコミュニケーションを取ることが難しいことを示しているとされた（袁鳳琴・袁真強 2010；王自坤 2016）。また、祖父母の時代遅れの伝統観念と甘やかしの態度は、農村留守児童の成長に不利な影響を与えると考えられている（肖悦他 2020；陸叶 2010）。

第2項 肯定的な影響（3編）

第二のカテゴリーに属する3編は、隔世育児が農村留守児童に肯定的な影響を与えることを主張している。その中で、2編の論文は隔代親和（即ち、祖孫関係）が農村留守児童の心理的健康に及ぼす肯定的な影響に焦点を当てている（趙景欣他 2016；李倩玉 2019）。趙景欣他（2016）の研究では、祖孫間の密接な関係が農村留守児童のうつ症状を軽減するのに役立つことが見出された。李倩玉（2019）の研究では、祖孫関係が子どもの肯定的な感情を顕著に予測し、否定的な感情を逆予測することが示された。加えて、別の1編の論文では、社会性の側面で、隔世育児が農村留守児童に対して肯定的な役割を果たすこと、特に子どもの自立能力、労働習慣、伝統的美徳を向上させる点において、その主な表れがあると指摘されている（高文揚 2021）。李倩玉（2019）の研究では、教育と認知発達に関する研究では否定的に描かれた農村留守児童のコミュニケーション能力が友人関係に関しては非留守児童よりも高いことを報告する点で重要である。

趙景欣他（2016）は山東省の2市3つの中学校の農村留守児童595名を対象に調査を行い、その中に父親が外出している児童421名と両親が共に外出している児童174名が含まれていた（研究では事前に母親が外出している児童は除外されている）。この研究は隔代親和と農村留守児童の抑うつとの関連性を分析し、留守煩悶の認知評価を媒介変数として、留守状況の異なるカテゴリー間の差異を探究することを目的としている。研究では隔代親和尺度、留守煩悶認知評価尺度、児童抑うつ尺度を用いて測定を行い、多変量分散分析を通じて、留守のタイプと性別を独立変数とし、隔代親和、留守煩悶の認知評価（肯定的および否定的）および抑うつを従属変数とした。研究結果から、1) 隔代親和と農村留守児童の抑うつの間には顕著な負の関連が存在し、肯定的認知評価と抑うつの間には顕著な負の相関があり、否定的認知評価と抑うつの間には顕著な正の相関があった、2) 留守煩悶の認知評価は隔代親和と農村留守児童の抑うつとの間に部分的な媒介効果をもっている、3) 留守煩悶認知評価の媒介効果には両親が共に外出している児童と父親のみが外出している児童の間で差異がある、という3点が報告された。研究の結論として、隔代親和は農村留守児童の抑うつを軽減する重要な資源であり、直接的に児童の抑うつを減少

させるだけでなく、肯定的認知評価を向上させ、否定的認知評価を低下させることでさらに抑うつレベルを下げることができると指摘されている。

李倩玉 (2019) は山東省の 2 市 5 つの中学から 568 名の児童を調査対象とし、その中に父母の両方が共に外出労働している農村留守児童 310 名 (祖父母+子ども)、非留守児童 257 名が含まれていた。この研究は農村留守児童と非留守児童の隔代親和 (祖孫関係) と情緒状態との関連性を探究し、友情の質を媒介変数として、さらに留守状態の異なるカテゴリー間の差異を考察することを目的としている。研究では隔代親和、友情の質、肯定的 / 否定的情緒の 3 つの尺度を用いて評価を行った。研究結果から、1) 留守児童は友情の質における親密な開示とコミュニケーションの面で非留守児童より優れていることが示された、2) 隔代親和は肯定的情緒を正の方向で予測し、否定的情緒を負の方向で予測する能力をもち、この効果は留守状態や性別によって影響されない、3) 隔代親和による留守児童の否定的情緒への予測効果は友情の質によって調節され、否定的情緒を減少させる潜在能力がある、という 3 点が示された。

高文揚 (2021) は 5 名の祖父母へのインタビューを通じて、祖父母が農村留守児童を労働に参加させることが多いため、農村留守児童が様々な労働技能を徐々に習得し、自立能力が強化されていることを発見した。さらに、祖父母は特に孝行や謙虚さなどの伝統的な徳を強調して教育していることが示された。したがって、隔世育児は農村留守児童の自立能力、労働習慣、そして伝統的美徳の培養に顕著な肯定的影響を与えると結論付けられた。

第 3 項 中立的な影響 (6 編)

第三のカテゴリーに属する 6 編の論文は、隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響を中立的であると評価し、その結果が具体的な状況に依存すると強調している。その中で、2 編の論文は心理的健康の領域に焦点を当てており、1 編の論文では隔世育児が農村留守児童の心理的発達に与える影響が主に祖父母の育児方針によって決まり、これらの育児方針は祖父母の教育レベル、経済状況、家庭関係などの要因と関連していると指摘している (李維亜・張豪 2014)。もう 1 編の論文では、異なる家族構成が農村留守児童の自己効力感に与える影響を探究している (董蔚然・鍾景迅 2023)。教育と認知発達の領域では、1 編の論文が学前の隔世育児が農村留守児童の学業成績に長期的な影響を与える理由について議論し、この違いは主に祖父母の教育能力に起因するとしている (劉馨月他 2021)。残りの 3 編の論文は、隔世育児が農村留守児童の社会的発達に与える影響を探究している (琚曉燕・張晨軒 2022 ; 司永芳 2012 ; 趙尉 2011)。李維亜・張豪 (2014) の研究は、祖父母の養育の特徴を甘やかしというよりコントロールに見る点で、祖父母による養育のイメージを覆す重要な研究である。また、趙尉 (2011) の研究は自立能力だけでなく、自主性や学習能力でも隔世育児を受けた農村留守児童がそれ以外の農村児童と比べ優れているとする例外的な研究である。ただし、この研究では親族による養育が非隔世育児の農村留守児童に含まれている点は大きな問題となり得る。

李維亜・張豪 (2014) は、祖父母のみによって養育されている農村留守児童 3 名に対するインタビューを通じて、祖父母の育児方針が農村留守児童の心理発達に与える影響と、教師や同級生グループがこれらの児童の心理発達に与える影響を探究することを目的とした。この研究では、自作のインタビューガイドを使用し、祖父母の育児方針、教師と同級生との相互作用、および児童の行動と心理発達の状況を含む内容を扱った。研究結果は、一般的な見解とは反対に、これらの祖父母が子どもたちを過度に甘やかすのではなく、ある程度の無視とコントロールを示していることを明らかにした。これは、彼らが代理の親としての役割を果たし、より多くの責任を負うことと関連している可能性がある。祖父母

の養育行動は、彼らの教育背景、経済状態、家族関係など、複数の要因の影響を受けている。また、祖父母が十分なサポートを提供できない場合、教師と同級生の役割が特に重要になることが分かった。さらに、農村留守児童の心理状態と行動は性別差を示し、不十分な家庭ケアと親の不在に関連する問題が見られた。

董蔚然・鍾景訊（2023）は、広東省の15県にある107の郷村学校の農村留守児童4364名を対象に調査を行い、核心家庭（875名、片親と子どもで構成）、隔世家庭（456名、祖父母と子どもで構成）、三世代同居（2648名、祖父母、片親、子どもで構成）、シングルペアレント家庭（317名）、再編家庭（68名）の5つのタイプに分けている。この研究の目的は、異なる家庭構造が農村留守児童の自己効力感に与える影響を研究することであった。研究では、農村留守児童の家庭構造を独立変数とし、子どもの自己効力感を従属変数とした。自己効力感は結果期待と効力期待の2つの次元に分けられ、学業期待、学歴期待、職業期待、発展地点期待、未来への自信、学校での表現、学校での感受、親の期待を満たす自信などを含む。研究結果から、農村留守児童の家庭構造がその自己効力感に顕著な影響を与え、異なる家庭タイプの児童の結果期待と効力期待に差があることが示された。核心家庭と三世代同居家庭の留守児童はより強い自己効力感を示し、再編家庭、隔世家庭、シングルペアレント家庭の留守児童は自己効力感が弱いことが報告された。

劉馨月他（2021）は全国4省の小学校の農村留守児童271名のアンケート調査に基づき、学齢前という重要な時期の隔世育児経験が子どもの入学後の学業成績に与える長期的な影響を研究し、学齢前の家庭教育が隔世育児と学業成績の間の作用メカニズムと隔世育児者の教育能力の調整作用を探求した。研究では、学業成績、学齢前の家庭教育、隔世育児、及び隔世育児者の教育能力をキーバリエブルとし、親の教育年数、年齢、家庭収入、子どもの健康状態、課外補習クラスへの参加の有無、地域差などの要因をコントロールした。研究結果から、隔世育児者の教育能力が異なれば、子どもの学業成績に与える長期的な影響も異なり、隔世育児者の教育能力が低い場合、子どもの入学後の学業成績に悪影響を与えることが明らかになった。一方で、隔世育児者の教育能力の向上は、学齢前の家庭教育の頻度を増やすことにより、子どもの学業成績に肯定的な影響を与えることが報告された。

琚曉燕・張晨軒（2022）は、陝西省のある県の380世帯の農村小学生の家庭に対して調査を行い、これらの家庭を完全な隔世育児（89世帯、祖父母と農村留守児童で構成）、不完全な隔世育児（139世帯、祖父母、片親と農村留守児童で構成）、完全な父母育児（152世帯、父母と農村留守児童で構成）の3つのタイプに分け、隔世育児モデルが農村留守児童の社会性発達に及ぼす影響を研究し、さらに父母の育児投入が隔世育児下で子どもの社会性発達に及ぼす調節作用を探究することを目的としていた。研究では隔世育児アンケート、父母の育児投入尺度、子どもの社会性発達尺度を使用して評価を行った。研究結果から、隔世育児は子どもの社会性発達に影響を与える重要な因子であることが示された。完全な隔世育児家庭の子どもの社会性発達レベルは、不完全な隔世育児および完全な父母育児の子どもたちよりも顕著に低く、後者2つの間の差異は顕著ではなかった。この結果は、農村の完全な隔世育児モデルが農村留守児童の社会性発達に及ぼす否定的な影響を強調し、子どもの社会性を促進するために父母の育児投入を増やす重要性を指摘している。

司永芳（2012）は陝西省西安市の農村S中学の197名の児童を対象に調査を行い、これらの児童を隔世育児を受けた農村留守児童99名と非隔世育児を受けた農村児童98名の2グループに分け、これら2種類の児童の社会化プロセスを比較することを目的としている。研究は隔世育児を独立変数、社会化を従属変数として、社会技能、道徳性、性格・行動特性、自己認識、学習目標と職業への目標の認識、の5つの次元を含む。研究結果は、

隔世育児が農村留守児童の社会性の発達に複雑な影響を及ぼすことを示した。隔世育児を受ける農村留守児童は、労働技能、独立した生活意識、責任感、道徳・礼儀、学習の自覚性、行動の自律性の面で優位性を示す。しかし、性格発達、人間関係、親子コミュニケーション、感情の表現と調整、偏差行動、教育監督の面で、隔世育児を受ける農村留守児童はその他の農村児童に比べて劣る。さらに、祖父母の教育能力の限界により、家庭教育における孫の心理状態や感情表現への理解と指導が不足していることが指摘された。これにより、孫は感情的な表現や調整を祖父母から適時に注意や十分な理解を得ることができず、隔世育児が児童の感情的なニーズを満たす上での短所となることが報告された。

趙尉（2011）は湖南省衡陽市南岳区南岳鎮の164名の小学生を調査対象とし、これらの小学生を隔世育児下の農村留守児童（108名、祖父母による単独育児）と非隔世育児下の農村児童（56名、父母や親戚などの保護者による育児）に分け、これら2グループの児童の社会化プロセスを比較分析することを目的としている。この研究は隔世育児モデルを独立変数とし、農村留守児童の社会化を従属変数としている。社会化は社会スキル、価値体系、社会規範、社会役割を含む。研究結果は、隔世育児下の農村留守児童は社会スキル、価値体系、社会規範、社会役割の4つの側面で一定の優位性を示した。例えば自立能力、自主性、学習能力が強いといった点で隔世育児を受けた農村留守児童は優れており、これは祖父母の伝統的な教育観によるものであるとされた。このような教育観は、子どもが辛抱強く勤勉で自己意識が高い特性を育むのに役立つ。政治観、社会的責任感、自分の学歴や職業期待に関して、隔世育児の児童と非隔世育児の児童との間に顕著な差はなかった。しかし、性格、心理状態、人間関係、自律性などの面で、隔世育児下の農村留守児童は非隔世育児の児童に劣っていた。

第3章「隔世育児が及ぼす農村留守児童への影響」の結果について考察

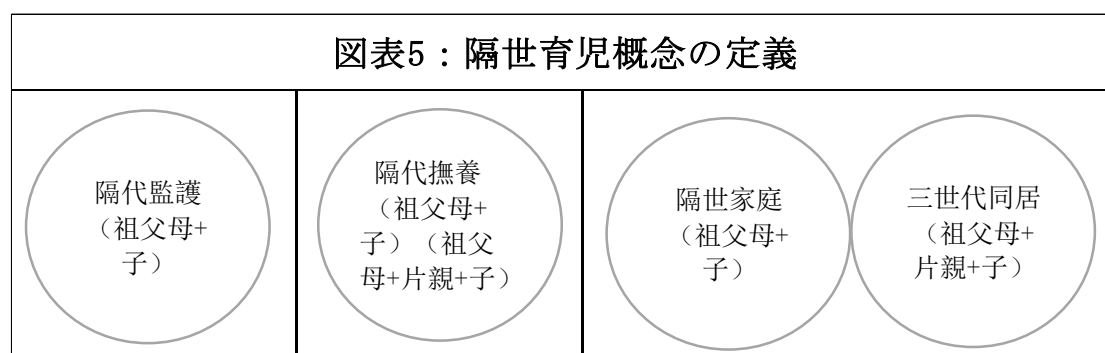
第1節 隔世育児概念の定義の食い違い

第2章で詳細に報告を行ったが、研究者たちが使用する「隔世育児」に関する用語には一貫性がない。その中には「隔代撫養」、「隔代照料」、「隔代看護」、「隔代監護」、「隔代教育」、「完全隔代教養」、「不完全隔代教養」、「共同育児」などの用語も含まれている。各用語によって、「隔世育児」の概念の定義が異なり、研究対象の計測範囲も変わっている。各文献における隔世育児の計測方法は異なり、居住様式の問い合わせや、祖父母の育児への参加度についての問い合わせなどが含まれる。これらの文献における隔世育児の測定方法に基づき、本節では43編の論文を「家族構成と居住様式」、「祖父母の育児への参加度」、「父母もしくは父母一方の外出労働」という3つのカテゴリーに分類して検討を行う。

第1項 家族構成と居住様式

家族構成と居住様式を基準にした隔世育児に関する論文は、合計20編あった。その中で、家族構成を基に隔世育児を定義した論文は1編のみで、その論文では農村留守児童の家族構成を「核心家族」(片親と子ども)、「三世代同居」(祖父母、片親と子ども)、「隔世家庭」(祖父母と子ども)、「シングルペアレント家庭」、「再編家庭」と分類している(董蔚然・鍾景迅 2023)。また、居住様式に基づいて隔世育児を定義した論文は19編ある(霍紅他 2023; 馮露霜・陳麗 2019; 張小屏 2018; 樊翠娟 2010; 高垂兵 2008; 謝琴紅他 2011; 王偉他 2014; 黃艷萃・李玲 2012; 董士曇・李梅 2010; 劉宏雁 2011; 張晶晶他 2015; 于佳琪 2023; 袁鳳琴・袁真強 2010; 陸叶 2010; 肖悦他 2020; 韋婷婷 2021; 王自坤 2016; 沙莎・苗春鳳 2023; 孫一葦 2013)。これらの論文の中での使用カテゴリーは一貫していないため、本研究で居住様式を整理して利用している。例えば、劉宏雁(2011)は農村留守児童の居住様式を「片親監護」(父親または母親と子ども)、「隔代監護」(祖父母と子ども)、「同世代監護」(子どもの兄弟と子ども)、「親族監護」(親族と子ども)と分類している。また、馮露霜・陳麗(2019)は、「母親撫養」(母親と子ども)、「父親撫養」(父親と子ども)、「隔代撫養」(祖父母と子ども、祖父母と片親と子どもの二種類)、親族撫養(親族と子ども)と分類している。

家族構成と居住様式に基づく隔世育児の定義に関する上記の三つの例では、隔世育児の対象が異なる。一つ目の隔世育児(上記の隔代監護)は、祖父母と子どものみを対象としている。二つ目の隔世育児(上記の隔代撫養)は、祖父母と子ども、祖父母と片親と子どもの二種類を含む。祖父母が育児に関わる場合は全て隔世育児と見なされ、これら二種類を統一的に議論している。三つ目の隔世育児(上記の隔代隔世家庭と三世代同居)は、隔世家庭(祖父母と子ども)と三世代同居(祖父母、片親、子ども)を指し、前述の一つ目の隔世育児と異なり、これらを対照群として扱っている。図表5はこれら三つの隔世育児の分類の詳細をさらに説明したものである。



第2項 祖父母の育児への参加度

祖父母の育児への参加度に基づき隔世育児を定義する論文は、合計 20 編ある。これらは祖父母の育児への参加度に応じて、祖父母単独で育児を行うパターンと、祖父母が主要な育て手となるパターンに区分されている。13 編の論文では、祖父母のみによる育児モデルとして定義されており、このモデルでは家庭成員は祖父母と農村留守児童のみで構成され、育児の全責任は祖父母が負う（汪采玉・賈勇宏 2022；琚曉燕・張晨軒 2022；秦敏 2015；李維亞・張豪 2014；高文揚 2021；鮑一帆 2022；謝芳・楊齊 2015；孫羽燕 2014；任潤 2013；劉芳 2018；趙尉 2011；程琳 2017；周考 2016）。残る 7 編の論文では、祖父母が主要な育て手となるモデルとして定義されており、この場合、親は家庭に存在する可能性があるが、育児の主な責任は祖父母に委ねられている（許双会他 2022；劉貝貝他 2019；侯曼他 2019；劉馨月他 2021；紀紅娟 2012；周国雷 2017；司永芳 2012）。これらの論文は、アンケートの質問項目（「子どもの主な育て手は誰ですか」）に対する回答から、誰が育児の主体であるかを定めている（高文揚 2021；劉貝貝他 2019）。祖父母が主な育て手として回答された場合は、その結果から隔世育児とされる。この基準に基づき、より詳細な基準が採用されている研究もある。劉馨月他（2021）では、「子どもが 0 歳から 3 歳までの間、主に誰が世話をしますか」といった質問が行われている。

「主要な育て手は誰か」という問い方は、回答者に一つの主要な育児担当者を選出するよう促す可能性があるが、実際には主要育て手が誰かが明確でない場合もある。さらに、この質問形式では、親が子どもと共に生活しているか否か、あるいは片親が育児に部分的に参加しているかについては言及されていない。この状況では、主要育て手が祖父母であっても、隔世育児といえるのかが明確ではない。つまり、「主要」という表現には曖昧さがあり、回答者がこれを主観的に解釈する可能性があるため、回答によっては育児の主体が異なる恐れがある。結果として、研究対象が適切に分類されない可能性が残される。

第3項 父母もしくは父母一方の外出労働

祖父母との同居を前提とし、父母または父母一方が外出労働することを基準として隔世育児を定義する論文が 3 編ある（韓志紅・郭智慧 2016；趙景欣 2016；李倩玉 2019）。両親が共に外出労働する場合、家族構成は祖父母と子どものみとなる。母親が外出労働する場合の家族構成は、祖父母、父親、及び子どもで構成される。父親が外出労働する際の家族構成は、祖父母、母親、および子どもである。

家族構成と居住様式、祖父母の育児への参加度、父母もしくは父母一方の外出労働という三つの側面から、隔世育児の計測方法を概観し、四種類の隔世育児の分類例を確認した。第1の分類では、隔世育児を「子どもが父母と同居していない状況下で、祖父母が単独で育児を行うこと」と定義しており、合計 31 編ある（汪采玉・賈勇宏 2022；秦敏 2015；李維亞・張豪 2014；高文揚 2021；鮑一帆 2022；謝芳・楊齊 2015；孫羽燕 2014；任潤 2013；劉芳 2018；趙尉 2011；程琳 2017；周考 2016；高亜兵 2008；霍紅他 2023；張小屏 2018；樊翠娟 2010；謝琴紅他 2011；王偉他 2014；黃艷華・李玲 2012；李倩玉 2019；董士曇・李梅 2010；劉宏雁 2011；張晶晶他 2015；于佳琪 2023；袁鳳琴・袁真強 2010；陸叶 2010；肖悦他 2020；韋婷婷 2021；王自坤 2016；沙莎・苗春鳳 2023；孫一葦 2013）。「祖父母が育児に関与する場合は隔世育児と考える」との見解を示す研究は 1 編のみである（馮露霜・陳麗 2019）。また、「主たる育て手は祖父母である（片親も育児に参加する可能性がある）」とする研究も合計 7 編ある（許双会他 2022；劉貝貝他 2019；侯曼他 2019；劉馨月他 2021；紀紅娟 2012；周国雷 2017；司永芳 2012）。さらに、「祖父母が単独で育児を行う」と「祖

父母と片親が共に育児を行う」の二つのグループを比較分析する論文が合計4編ある（董蔚然・鍾景迅 2023；韓志紅・郭智慧；趙景欣他 2016；琚曉燕・張晨軒 2022）。

これら四種類の隔世育児の分類は、「隔世育児において片親の参加が含まれるのか否か」という一つの重要な問題を提起している。隔世育児とは、祖父母の単独で育児を指すのか、それとも祖父母と片親が共に育児を指すのかが研究によって異なることは、隔世育児の影響を厳密に分析することを不可能にしている。隔世育児とされる範囲が異なれば、隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響に関する研究結果が一貫しないことは自明である。

上記の隔世育児に関する四つの概念定義の分類において、「祖父母が育児に関与する場合は隔世育児と考える」と「主たる育児者は祖父母である（片親も育児に参加する可能性がある）」の二つのカテゴリーを一つに統合した。これらのカテゴリーは、祖父母が「主要な」養育者としての役割を果たすかどうかにより異なるが、祖父母と子ども、または祖父母、片親、子どもという二つのタイプを含み、それらを統一された一つの全体として扱う点では同一のグループと見なし得る。当初の四つのタイプを三つに簡素化し、これら三つの隔世育児概念の違いごとに農村留守児童に及ぼす影響に関して分析を行った結果は図表6に示す。

影響の分類	図表6：隔世育児概念の定義			合計
	 祖父母のみ の育児 (祖父母+子)	 片親も育児に 参加の可能 (祖父母+子) (祖父母+片親 +子)	 祖父母のみ の育児(祖 父母+子)	
否定	27	6	1	34
中立	2	2	2	6
肯定	2	0	1	3
合計	31	8	4	43

図表6で示している影響の結果から、「祖父母のみによる育児」と「祖父母が育児を行い、片親も場合によっては育児に参加する」という二つのタイプは、主に否定的な影響を及ぼしていることが指摘できる。対照的に、「祖父母のみによる育児」と「二世代による共同育児」を比較したカテゴリーでは、肯定的または中立的な影響が主流である。父母の一方が祖父母と共同育児に参加している状況が確認された場合、隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響が全面的に否定的ではなくなるのである。これは、父母の育児参加が研究結果にとって重要な意味をもつ可能性を示唆している。

第2節 隔世育児への先入観の存在

43編の研究論文を分析した結果、その中で3編が隔世育児の肯定的影響、6編が中立的影響、34編が否定的影響を指摘していた。否定的や中立的影響を報告した研究の多くは隔世育児に対して明確な定義を欠いており、潜在的な媒介因子が十分考慮されておらず、隔世育児と農村留守児童が抱える問題との因果関係の厳密な論証が行われていなかった。また、これらの研究には隔世育児に対する先入観が存在し、その偏見が研究結果に影響を与える可能性がある。分析を通じて、これらの論文が隔世育児に関して抱く一般的な先入観は、祖父母の育児方針、農村留守児童の家族関係、農村留守児童の家庭構造、の3点に顕著に表れていたことが明らかになった。

第1項 祖父母の養育スタイルへの先入観

43 編の論文を整理・分析した結果、祖父母の養育スタイルに関する主要な観点は三つの側面に集約される。第一に、祖父母は文化教育水準が比較的低いため、養育に重点を置きながら教育面を軽視し、農村留守児童の学習指導において必要な能力を有していないことから、その学業成績に影響を及ぼしているとするものである。第二に、祖父母は孫に対して甘やかしを示すことが多く、これにより農村留守児童が自己中心的、わがままな性格を形成し、独立心に乏しい傾向をもつようになっているとするものである。第三に、祖父母は高齢であり、体力及び精力に限界があり、時代遅れの育児観念を持つことが、科学的育児実践において不利な影響を及ぼす可能性があるとするものである。

1. 祖父母の「養育重視、教育軽視」

43 編の論文のうち、21 編が祖父母の低い文化水準が農村留守児童のパフォーマンスに与える否定的な影響について言及している。これらの研究は、祖父母の教育レベルが、特に宿題指導の面で子どもの教育における彼らの能力を一定程度制限していることを強調している。しかし、このような関連性が文献で頻繁に指摘されているにもかかわらず、祖父母の文化水準と農村留守児童の学業パフォーマンス、心理健康や社会性などとの間の関係については、多くの研究で十分な証拠が欠如している。

紀紅娟 (2012)、鮑一帆 (2022)、袁鳳琴・袁真強 (2010)、肖悦他 (2020)、秦敏 (2015) では、アンケートとインタビューに基づいて考察が行われているが、詳細な研究データや論証プロセスは提供されておらず、祖父母の低い文化水準が子どもの教育に不十分であり、家庭教育機能が欠如しているという結論が直接導かれている。

そして、高亜兵 (2008) は、異なる監護者タイプ下の農村留守児童（片親監護、隔世監護、上世代監護、同世代監護に分類）と非留守児童の心理健康状態を比較分析している。研究結果は、非留守児童の心理的健康レベルが農村留守児童よりも顕著に高いことを示す。さらに、農村留守児童グループ内で、隔世監護下にある農村留守児童は、片親監護下の農村留守児童と比較して、心理的健康状態がより悪いと報告される。この結果の原因を分析する中で、著者は隔世監護下の心理的健康問題の主要要因を家庭教育の不足に求めている。具体的には、祖父母の教育水準が低く、農村留守児童の学業に対する効果的な指導が困難であるため、子どもの学習や品格の発達に対する注意が足りていないことが問題を引き起こしていると指摘する。しかし、祖父母の低教育水準と学業指導能力の欠如が農村留守児童の低い心理的健康レベルに直接的に繋がるかどうかは十分に検討されていない。黄艶萃・李玲 (2012) も、隔代育児下の農村留守児童の心理的健康レベルの不足を、祖父母が育成を重視しつつ教育を軽視する養育スタイルのためであるとしているが、この二つの関係は証明されていない。琚曉燕・張晨軒 (2022)、汪采玉・賈勇宏 (2022)、程琳 (2017) は、祖父母のみによる育児モデル下の農村留守児童の社会性発達の低下を、祖父母の低い教育水準と「養うだけで教えない」養育スタイルのためであるとしているが、この因果関係も十分に証明されていない。

また、侯曼他 (2019)、沙莎・苗春鳳 (2023)、陸叶 (2010)、董士曇・李梅 (2010)、王自坤 (2016)、韋婷婷 (2021)、周考 (2016)、周国雷 (2017)、孫一葦 (2013)、于佳琪 (2023) では、祖父母の低い文化水準が学習指導の能力に影響を及ぼしており、これが農村留守児童の学業成績の不良の主な要因であると指摘されている。しかしながら、祖父母の学習指導能力の不足が具体的にどのように表れるのかについての詳細な説明はなく、また祖父母の指導能力の不足と農村留守児童の学業成績不良との因果関係を十分に証明する証拠も提供されていない。

さらに、劉宏雁（2011）、紀紅娟（2012）では、教師の証言を留守児童の学業成績の悪さを判断する根拠として使用している。この方法が農村留守児童の実際の状況を客観的に反映しているかどうかに関しては、さらなる検証が必要である。

しかしながら、許琪（2018）、楊菊華・段成榮（2008）、郝明松（2022）では、母親が単独で外出労働しているかどうか、祖父母と同居する子どもの学業成績に重要な影響を及ぼしていることが明らかにされている。母親が単独で外出労働する場合に限り、農村留守児童の学業成績に顕著な負の影響がみられる。これに対し、父親が単独で外出労働する場合や両親が同時に外出労働する場合には、子どもの学業成績に両親が共にいる時との顕著な差はない。これは、農村留守児童の学業成績における母親の存在の有無が、重要な媒介変数であることを強く示唆している。

2. 祖父母の甘やかし

43編の論文の中で、合計20編の論文が祖父母による子どもへの甘やかしという養育スタイルに注目している。その中で5編はデータ分析段階で甘やかしという育児スタイルを議論していないが、解決策を提案する際に祖父母に甘やかしの育児スタイルを避けることを勧めている（馮露霜・陳麗 2019；韋婷婷 2021；趙尉 2011；任潤 2013；劉芳 2018）。また、10編の論文は隔代育児中の農村留守児童問題を祖父母の甘やかしという育児スタイルと関連づけるが、両者の間の因果関係を十分に論証することない（董士曇・李梅 2010；張晶晶他 2015；高亜兵 2008；韓志紅・郭智慧 2016；劉宏雁 2011；沙莎・苗春鳳 2023；陸叶 2010；孫羽燕 2014；程琳 2017；周国雷 2017）。さらに、5編の論文は研究方法を明記せずに、祖父母の甘やかしという育児スタイルに問題があるという結論を直接出している（肖悦他 2020；鮑一帆 2022；王自坤 2016；紀紅娟 2012；秦敏 2015）。しかし、これらの結論の多くは研究結果に依拠したのではなく、甘やかしという養育スタイルが影響しているかどうか検証することのないまま偏見に基づいて論じられているという問題を抱えている。

馮露霜・陳麗（2019）の研究では、隔世育児のモデル下の農村留守児童は母親育児と父親育児という異なる監護者のタイプの農村留守児童と非留守児童よりも主観的幸福感が低いと結論付けた。しかし、提案された対策では、祖父母が子どもを甘やかすべきではないとされている。これは著者が隔世育児に一定の偏見を持っている可能性を示唆しており、隔世育児自体に問題があると見なし、祖父母の甘やかしという養育スタイルと農村留守児童の主観的幸福感を直接結びつけているようである。多くの論文で、データ分析の段階では甘やかしの養育スタイルについて言及されていないものの、解決策を提案する際に祖父母に甘やかしの育児スタイルを避けるよう勧めている（韋婷婷 2021；趙尉 2011；任潤 2013；劉芳 2018）。

また、農村留守児童問題の原因を分析する際に、多くの論文が甘やかしに関する実際のデータや証拠を提供せずに、留守児童問題を祖父母の甘やかしという育児スタイルに直接結びつけている。しかし、これら二つの間に因果関係が存在するかどうかについては、さらなる論証が必要である（董士曇・李梅 2010；張晶晶他 2015；高亜兵 2008；韓志紅・郭智慧 2016；劉宏雁 2011；沙莎・苗春鳳 2023；陸叶 2010；孫羽燕 2014；程琳 2017）。

董士曇・李梅（2010）の研究では、隔代養育の問題点を指摘し、「祖父母が高齢で体が弱く、文化教育水準が相対的に低い、世代間の隔たりがある、孫に対して甘やかしがある」と考えている。しかし、論文中では「甘やかし」の具体的な定義や表現形式についての明確な説明が欠けている。

張晶晶他（2015）は、農村留守児童と非留守児童の養育状況を比較することで、片親監

護と比較して、隔代監護下の祖父母は子どもの就寝時間の管理（例えば、子どもに就寝時間を自由に決めさせる）が相対的に弱いと指摘している。この違いは祖父母の甘やかしという育児スタイルに起因するもので、それが子どもをわがままで気まぐれな性格にする原因になっているとするのである。しかし、研究でこのような関連性を提示しているにもかかわらず、「甘やかし」という用語を明確に定義しておらず、甘やかし行為や児童の性格を直接測定していない。また、なぜ就寝時間を自由に決めさせるのではなく管理させる方が適切であるといえるのかに関する根拠も明確にされていない。そのため、就寝時間に対して寛容であることを甘やかしという育児スタイルと見なしている点、その育児スタイルが子どもの性格に影響しているとする点は、実際の測定と論証を欠いている。

高亜兵（2008）、韓志紅・郭智慧（2016）は、異なる監護者タイプの下での農村留守児童と非留守児童の心理的健康状態を比較した。その結果、完全に祖父母によって監護される農村留守児童は、心理的健康問題を示す傾向が高いことが示された。しかし、研究の結論でこれらの心理的健康問題を甘やかしのためであるとしているにも関わらず、データを分析する際に甘やかしの具体的な行動やそれをどのように測定したかは明記されていない。

劉宏雁（2011）は、農村留守児童と非留守児童の科学的リテラシーを比較分析し、留守児童の低い科学的リテラシーを祖父母の甘やかしという養育スタイルのためであるとしている。しかし、この研究では、二つのグループの児童の科学的リテラシーのみを調査しており、祖父母の養育スタイルについては具体的に分析していない。

この他にも、隔世育児における農村留守児童の問題を祖父母の甘やかし養育スタイルと関連付けているが、両者の間の因果関係を十分に論証していない論文が多数存在する（沙莎・苗春鳳 2023；陸叶 2010；孫羽燕 2014；程琳 2017；周国雷 2017）。

そして、肖悦他（2020）では、論文全体を通じて使用した研究方法が明記されておらず、直接に農村留守児童の問題及びその問題がどのように生じるかを議論している。研究では、農村留守児童が主に年配の祖父母によって監護されており、監護者の知識の限界と伝統的な観念の影響で、これらの児童は過度に甘やかされがちであると指摘されている。このような甘やかしは、彼らが勉強に励まない、喧嘩をする、夜遅くに帰宅しない、情緒的なニーズを満たすために金銭を過度に追求するなど、一連の問題を引き起こすとするものの、それらを裏づける事実はまったく示されていない。また、いくつかの論文では、採用した研究方法を具体的に説明せず、祖父母の育児スタイル（例えば甘やかし）が農村留守児童に他人を羨む気持ちをもたせ、進取の気持ちを失わせやすい（鮑一帆 2022）、自己中心的で、わがままで、自分勝手な性格を容易に形成させる（王自坤 2016）、心身の健康に悪影響を及ぼす（紀紅娟 2012）、農村児童がいじめられやすくなる（秦敏 2015）、などと根拠を示さないまま断定的に論じており、甘やかしが農村留守児童問題を生じさせているという偏見に基づいた判断をしていることが明らかである。

3. 祖父母の「時代遅れの育児観念」

多数の研究で、祖父母は高齢であり、子どもの世話を行う際に必要な体力及び精力が不足しており、また、時代遅れの育児観念を持ち、科学的な育児法に関する理解が欠けると指摘されている。しかし、何をもって時代遅れの育児観念や科学的な育児法であるとするかは具体的でなく、それらが実際に農村留守児童の問題と関係していることを明確にした研究は見られない。

謝芳・楊齊（2015）では、農村地区における1歳未満の乳児7名の母乳育児状況についてのアンケート調査を行い、「母親が長期にわたり不在であるため、母乳育児の割合が低

い」という結果を得た。分析および議論の中で、「祖父母の文化教育水準が低く、母乳育児の利益や早期の離乳食添加の危険性についての認識が不足している」と指摘しているものの、少なくとも母親が長期にわたり不在であるために乳児が母乳育児を受けられないことは、祖父母の文化教育水準が低いことと無関係である。これは、著者が隔世育児に先入観をもち、それ自体に問題があると考えていることを反映している可能性がある。

そして、肖悦他（2020）は、「農村留守児童の監護者は主に高齢の老人で、伝統的な観念の影響により、農村留守児童に対して甘やかす傾向がある」、「農村留守児童の監護者の文化教育水準は一般的に低く、多くは高齢者であり、伝統的な教育観念は現代の子どもの教育ニーズを満たすことができない」、「時代の進歩に伴い、祖父母の教育観念も常に更新される必要がある」と何度も高齢であることとその考えが時代遅れであることを結び付けた指摘をしている。しかし、論文ではこれら「時代遅れの伝統観念」が具体的に何を指すのか、祖父母の時代遅れの伝統観念が現代の教育理念とどのように異なるのか、なぜこれらの観念が子どもの教育の妨げになるのかについて、終始説明していない。

また、一般的な見解として、高齢の祖父母が子どもの世話をする際、体力と精力が限られている（張晶晶他 2015）上、時代遅れの教育観念をもつため、現代科学に基づく育児内容を提供することがしばしばできない（汪采玉・賈勇宏 2022；韓志紅・郭智慧 2016；王自坤 2016）という指摘を行う研究も存在する。このような教育方式は、子どもの思考力や創造力が時代の要求に合わないことにつながり（鮑一帆 2022；劉宏雁 2011）、彼らの心身の発達に負の影響を与えるとされている。しかし、これらの論文の中で、「祖父母の時代遅れの教育観念」と「子どもの心身の発達」との間の関係については、厳密な論証が行われていない。さらに、何をもちて伝統的な育児とし、何をもちて科学的な育児とするのか、伝統的な育児と科学的な育児の区別と境界も明確にされていない。

このように「高齢である」祖父母の時代遅れの育児観念を根拠なく問題視する研究は多いが、祖父母世代の育児観念が単純に伝統的というべきではなく、また祖父母であることが高齢であることを必ずしも意味せず、したがって時代遅れの育児観念をもっていると無前提に議論するのに適さないことは明らかである。李洪曾（2006）によると、祖父母の育児者としての教育観念は比較的伝統的であるが、子どもの発達の状態は比較的良好であるとされている。具体的には、祖父母が主要な育児者である場合の教育観念は、伝統と現代思潮の融合したものであるとされる。伝統的な要素として、儒教文化、封建的宗法思想、そして伝統的な美德が彼らの教育方法に深く影響を与えていると同時に、現代的な思考様式、例えば実用主義、資本主義的な観念、現実主義の態度も彼らの教育観念に位置を占めていると李洪曾は指摘する。このような融合された教育観念は、子どもたちが勤勉な学習、耐え忍ぶ努力、競争意識などの良い品質を形成するのを促進していることが指摘されている。また、祖父母の年齢が常に高齢であるわけではない。周鵬（2020）の調査報告によると、全国において、2019年に孫の世話をした中高年者の年齢分布は幅広く、45歳から94歳まで様々であり、平均年齢は59.3歳だった。この年齢層は、伝統的な意味での「老年者」の定義に完全には当てはまらない。

第2項 農村留守児童の家族関係への先入観

農村留守児童の家族関係において、父母が長期間にわたって側にいないため、農村留守児童は祖父母と長期間生活するしかなく、親子関係が次第に希薄になり、農村留守児童の情緒的ニーズが満たされにくいことが指摘されている（沙莎・苗春鳳 2023；孫一葦 2013；張晶晶他 2015）。さらに、彼らの感情発達や人格形成に偏りが生じているともされる（王偉他 2014；董士曇・李梅 2010）。

しかし、一方で、趙景欣他（2016）では、父親外出労働下の隔世育児（祖父母＋母親＋子）と両親外出労働下の隔代育児（祖父母＋子）という二つの集団を比較して、どちらのグループでも、隔世育児が子どもの抑うつを直接的に軽減するだけでなく、彼らの肯定的な認知的評価を高め、否定的な認知的評価を低減することによって、子どもの抑うつを軽減することが明らかになっている。これは、農村留守児童の心理的健康にとって、祖父母との関係が非常に重要な変数であることを示している。父母が不在であることの問題があるとしても、それは祖父母による養育に問題があることを直接には意味しない。養育者の存在は、それが父母でないとしても子どもの心理的健康にとって重要であることは当然のことである。

第3項 農村留守児童の家庭構造への先入観

農村留守児童の家族構造に関する議論において、一つの普遍的な先入観が見受けられる。それは、父母もしくは父母の一方が外出労働するために家庭を離れる場合、親子の分離により家族構造が不完全になるという認識である。この見解は、不完全な家族構成の影響はどんな時期にも変わらず、農村留守児童の成長に必ず否定的な影響を及ぼすとするもののように思われる。しかし、実際には家族構造が与える影響は子どもの年代によって影響を受ける可能性が示唆されている。

これらの論文では、居住様式に基づいて農村留守児童を「片親監護、隔代監護、同代監護、親戚監護」といった異なるカテゴリーに分類し、これらのカテゴリーに属する農村留守児童と非農村留守児童とを比較している。その結果、祖父母監護下の農村留守児童は非留守児童と比べて犯罪率が高く（董士曇・李梅 2010）、身体損害の検出率も高く（霍紅他 2023）、心理的健康状態も悪い（黄艶苹・李玲 2012；謝琴紅他 2011；高亜兵 2008；王偉他 2014）ことが判明した。これらの研究は、現在の農村留守児童の心理的および生理的状况に焦点を当てている。

王紅英他（2021）の研究では、制御変数を考慮に入れない状況下では、隔世育児が児童の健康状態に及ぼす影響は、統計学的に有意であった。しかし、児童の年齢を制御変数として導入した場合、家庭の年間収入、家庭の人口規模、祖父母の年齢及び性別、そして隔代育児の実施の有無は、児童の健康状態に統計学的に有意な影響を与えていないことが明らかにされている。したがって、隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響に関しては、一概に断定することはできず、祖父母の年齢、性別、家族の人口規模、年収、児童の年齢などの中間変数を考慮する必要があると考えられる。

第3節 対象文献の研究対象

農村地域には、祖父母による完全な監護下にある農村留守児童のみならず、祖父母及び父母の一方と共に生活している農村留守児童も存在している。しかし、分析対象とした43編の研究の内、18編の論文では、「祖父母及び父母の一方と共に生活する」居住様式が、「母親のみと居住する」や「祖父母のみと居住する」のカテゴリーに誤って分類される可能性がかなり高いことが確認できている。加えて、多くの論文において、議論している農村留守児童には、シングルペアレントの児童が定義上含まれているが、シングルペアレントの児童は農村留守児童の定義には当てはまらない。

第1項 多くの農村留守児童も祖父母と片親と生活している

居住様式に基づいて研究対象を分類する19編の論文を分析した際に、18編は分類上の誤りが存在する可能性があることが明らかになった（于佳琪 2023；袁鳳琴・袁真強 2010；

樊翠娟 2010；張小屏 2018；陸叶 2010；肖悦他 2020；王自坤 2016；韋婷婷 2021；王偉他 2014；黃艷萃・李玲 2012；霍紅他 2023；謝琴紅他 2011；高亜兵 2008；劉宏雁 2011；董士曇・李梅 2010；張晶晶他 2015；馮露霜・陳麗 2019；沙莎・苗春鳳 2023)。残りの1編の論文では、居住様式に基づき、農村留守児童を「片親監護（片親＋子）」、「隔代監護（祖父母＋子）」、「上代監護（親戚等＋子）」、「同輩監護（兄弟＋子）」の4つのタイプに分類しているが、各タイプにおける具体的な人数については明らかにされていない（孫一葦 2013）。

段成栄・頼妙華・秦敏の「21世紀以来の中国における農村留守児童の変動傾向に関する研究」によると、2000年から2015年における中国農村留守児童の居住様式（図表7）によると、2000年、2005年、2010年、2015年の祖父母のみと居住する農村留守児童の割合は、それぞれ30.24%、32.8%、32.67%、23.91%であった。祖父母のみと居住する農村留守児童の割合は、農村留守児童全体の約30%であるといえる。そして、祖父母と父母の一方（片親）と共同居住する農村留守児童の割合は、21.09%、21.56%、24.49%、28.8%となっていた。このデータは、祖父母による単独で育児にあるケースのみならず、一部の農村留守児童が祖父母と父母の一方と共に生活していることを意味している。言い換えると、100名の農村留守児童中、約24名は祖父母と父母の一方と共同居住しているということである。これは上記の4年間のデータに基づく平均値に基づいている。また、片親のみと同居する農村留守児童の割合は、それぞれ44.02%、43.21%、28.77%、23.11%であった。農村留守児童の居住様式において、「片親のみと居住する」「祖父母のみと居住する」「祖父母と父母の一方と共同居住する」という三つのパターンが主要な居住モデルである。ただし、このデータは、農村留守児童全体を基にして計算されており、全ての農村児童ではないということには注意が必要である。例えば、図表7の「祖父母のみと居住する」の割合は、全ての農村留守児童の中で、祖父母のみと同居している割合を指す。

農村留守児童の居住様式		2000年	2005年	2010年	2015年
父母一方の 外出労働	片親と留守	44.02	43.21	28.77	23.11
	片親と祖父母と留守	21.09	21.56	24.49	28.8
父母両方の 外出労働	祖父母と留守	30.24	32.8	32.67	23.91
	親戚などと留守	0.07	0.35	10.7	21.29
	子ども独自留守	4.58	2.08	3.37	2.89
合計		100	100	100	100

（出典：段成栄・頼妙華・秦敏「21世紀以来の中国における農村留守児童の変動傾向に関する研究」（中国語：21世纪以来我国农村留守儿童变动趋势研究）『中国青年研究』2017年6期，2017，p.56より筆者作成。

*「片親と居住する」と「片親と祖父母と共同居住する」という居住様式の割合を統計するために、本研究では図表2の「父親と留守」と「母親と留守」のカテゴリーを「片親と留守」として統合し、同時に、「父親と祖父母と留守」と「母親と祖父母と留守」の二つのカテゴリーを「片親と祖父母と留守」として一つのカテゴリーに統合した。）

片親と祖父母と留守児童という居住形態も主要な居住様式であることは先に述べたとおりである。しかし、これら19編の論文の中で、18編は「祖父母と父母の一方と共同居住する」という居住様式は分類に存在せず、議論もされていない（図表8）。これらの研究では、全ての調査対象を居住様式に基づいて分類しているが、「祖父母及び父母の一方と

共同居住する」という居住様式は含まれておらず、「祖父母及び父母の一方と共同居住する」ケースが除外されていることも明示していない（袁鳳琴・袁真強 2010；于佳琪 2023；樊翠娟 2010；張小屏 2018；陸叶 2010；肖悦他 2020；王自坤 2016；韋婷婷 2021；王偉他 2014；黃艷萃・李玲 2012；霍紅他 2023；謝琴紅他 2011；高亜兵 2008；劉宏雁 2011；董士曇・李梅 2010；張晶晶他 2015；沙莎・苗春鳳 2023；孫一葦 2013）。たとえば、袁鳳琴・袁真強（2010）は全ての調査対象（農村留守児童）を居住様式に基づいて片親監護（片親＋子）、隔代監護（祖父母＋子）、同輩と自己監護、親族監護（親戚＋子）というカテゴリーに分類しているが、「祖父母と父母の一方と共同居住する」ケースが含まれていない。「祖父母及び父母の一方と共同居住する」という居住様式を分類に明確に含めた論文は 1 編のみである（馮露霜・陳麗 2019）。

これら 19 編の論文の中で、農村留守児童の各居住様式の人数と割合を具体的に説明していない 1 編（孫一葦 2013）を除くと、残りの論文で提供されている「片親のみと居住する」及び「祖父母のみと居住する」の人数と割合は、図表 7 のデータを大幅に上回るか、または大幅に下回るかのどちらかである。これは、調査方法あるいは分類の不備により、祖父母と片親と児童という居住様式が適切に処理されなかったことにより、農村留守児童の居住様式が実態とは異なる分類をされたことを強く示唆するものである。

10 編の論文で調査された対象者の中で、「祖父母のみと居住する」農村留守児童の割合が図表 7 のデータを著しく上回ることが明らかになった。このうち、4 編の論文ではその割合が図表 7 のデータの 1.5 倍から 2 倍の間であった。さらに 4 編の論文では 2 倍から 3 倍の間であり、残りの 2 編の論文ではそれぞれ 3.4 倍と 4 倍に達した。具体的には、袁鳳琴・袁真強（2010）の論文では、「祖父母のみと居住する」農村留守児童の割合が 50.6%に達し、これは 2010 年の割合である 32.67%よりも約 1.5 倍高い。陸叶（2010）の論文では、「祖父母のみと居住する」農村留守児童が 88%に達し、図表 7 の 2010 年の割合である 32.67%の約 2.7 倍であった。肖悦他（2020）の論文では、83%の農村留守児童が祖父母のみと同居し、これは図表 7 の 2015 年の割合である 23.91%の約 3.4 倍であった。王自坤（2016）の論文では、95%の農村留守児童が祖父母のみと同居し、これは図表 7 の 2015 年の割合である 23.91%の約 4 倍であった。韋婷婷（2021）の論文では、「祖父母のみと居住する」農村留守児童の割合が 51%に達し、これは図表 7 の 2000 年、2005 年、2010 年、2015 年の 4 年間の平均値 30%の約 1.7 倍であった。謝琴紅他（2011）が調査した 1108 人の農村留守児童のうち、70.9%が祖父母のみと同居し、これは図表 7 の 2010 年の割合である 32.67%の約 2.1 倍であった。高亜兵（2008）の論文では、49.5%の農村留守児童が祖父母のみと同居し、これは図表 7 の 2005 年及び 2010 年の割合である 32.8%および 32.67%の約 1.5 倍であった。劉宏雁（2011）が調査した 214 人の農村留守児童のうち、80.2%が祖父母のみと同居し、これは図表 7 の 2010 年の割合である 32.67%の約 2.5 倍であった。張晶晶他（2015）の論文では、「祖父母のみと居住する」農村の留守児童の割合が 53.5%に達し、これは図表 7 の 2015 年の割合である 23.91%の約 2.2 倍であった。沙莎・苗春鳳（2023）の論文では、「祖父母のみと居住する」農村留守児童の割合が 53.4%に達し、これは図表 7 の 2000 年、2005 年、2010 年、2015 年の 4 年間の平均値 30%の約 1.8 倍である。

7 編の論文において調査された対象者の中で、「父母の一方とのみ居住する」農村留守児童の割合が、図表 7 のデータを著しく上回っていることが明らかになった。そのうち、1 編の論文でその割合は図表 7 のデータの 1.6 倍であり、3 編の論文では 2 倍から 3 倍の間、さらに 1 編の論文では図表 7 のデータの 3 倍であった。残りの 2 編の論文のうち、1 編は図表 7 の 2000 年、2005 年、2010 年、2015 年のデータよりもわずかに高く、もう 1 編

の論文の割合は、これら4年間のデータを著しく上回っていた。具体的には、于佳琪(2023)の論文において、48.3%の農村留守児童が父母の一方とのみ居住しており、これは図表7の2000年、2005年、2010年、2015年の「父母の一方とのみ居住する」農村留守児童の割合である44.02%、43.21%、28.77%、23.11%を上回っている。樊翠娟(2010)の論文では、調査された農村留守児童の46%が父母の一方とのみ居住しており、これは図表7にある2010年の割合28.77%の約1.6倍である。張小屏(2018)の論文では、調査された農村留守児童の61.8%が父母の一方とのみ居住しており、これは図表7にある2015年の割合23.11%の約3倍である。王偉他(2014)の論文では、56.5%の農村留守児童が父母の一方とのみ同居しており、これは図表7にある2015年の割合23.11%の約2.5倍である。黄艷萃・李玲(2012)の論文では、67.3%の農村留守児童が父母の一方とのみ居住しており、これは図表7にある2010年の割合28.77%の約2.4倍である。霍紅他(2023)の論文では、58.7%の農村留守児童が父母の一方とのみ居住しており、これは図表7にある2000年、2005年、2010年、2015年の割合44.02%、43.21%、28.77%、23.11%を著しく上回っている。董士墩・李梅(2010)の論文では、調査された500名の農村留守児童のうち66.4%が父母の一方とのみ同居しており、これは図表7にある2010年の割合28.77%の約2.3倍である。

18編の論文の中で、最後の1編では、「祖父母及び父母の一方との共同居住」という居住モデルを含むカテゴリーが明確に採用されているが、この研究でも居住様式で示される人数と割合は、図表7のデータとは顕著な差が存在した(馮露霜・陳麗2019)。具体的に、馮露霜・陳麗(2019)の論文で、農村留守児童の居住様式を「母親撫養」(母親と子ども)、「父親撫養」(父親と子ども)、「隔代撫養」(祖父母と子ども、祖父母と片親と子どもの二種類)、親族撫養(親族と子ども)と分類している。しかし、「片親撫養」の農村留守児童の割合は57.2%に上り、「隔代撫養」の農村留守児童の割合は35.3%で、「片親撫養」の農村留守児童の割合は、図表7にある2015年の割合23.11%の約2.4倍である。

19編の論文の内18編までで祖父母と父母の一方と居住する居住様式が分類に存在せず、図表7のデータと大きく乖離していたことから、「祖父母と父母の一方と共同居住する」という居住様式が誤って「片親のみと居住する」または「祖父母のみと居住する」というカテゴリーに分類されている可能性がかなり高い確率で存在する。このような分類の誤りは、これら三つの居住様式に関する混乱を引き起こし、それぞれの居住様式の独自の影響と効果を隠蔽することになり、祖父母が農村留守児童に与える影響の理解を曖昧にしまう可能性がある。

図表8: 各研究における農村留守児童の居住様式の分類について

順番	文献名(著者・発表年)	隔代育児の概念の定義	研究対象	総人数(人)	各グループの人数と割合(%)	片親育児と隔代育児の割合
1	「農村留守児童の家庭教育の問題と対策研究」(袁鳳琴・袁真強 2010)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 同世代と自己監護 親族監護(親戚+子)	留守1027	①農村留守児童のみ 片親監護 283人(27.5%) 隔代監護 519人(50.6%) 同世代と自己監護146人(14.2%) 親族監護 79人(7.7%)	片親監護27.5% 隔代監護50.6%
2	「農村留守児童の学校でのパフォーマンスに対する家庭教育のサポートの影響-2020年中国家庭追跡調査に基づいて」(于佳琪 2023)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 母親監護(母親+子) 父親監護(父親+子) 隔代監護(祖父母+子) 自己監護(子どものみ)	留守861	①農村留守児童 母親監護 363人(42.2%) 父親監護 53人(6.1%) 隔代監護 307人(35.7%) 自己監護 138人(16.0%)	片親監護48.3% 隔代監護35.7%
3	「異なる留守タイプの農村留守児童の心理健康の差異比較」(樊翠娟 2010)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 母親看護(母親+子) 父親看護(父親+子) 隔代看護(祖父母+子) 叔父母看護(親族+子) 自己監護(子どものみ) 同世代監護(兄弟+子)	留守5108	①農村留守児童のみ 母親看護 2059人(40.3%) 父親看護 293人(5.7%) 隔代看護 1471人(28.8%) 叔父母看護 242人(4.7%) 自己監護 102人(2.0%) 同世代監護 941人(18.4%)	片親看護46.0% 隔代看護28.8%
4	①農村留守児+A19:G22童 片親監護 15人(25.9%) 隔代監護 31人(53+B6.4%) 親戚監護 7人(12.1%) 他の監護 5人(8.6%) ②非留守児童	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 混合監護(親族+子/兄弟+子/子どものみ)	留守847	①農村留守児童のみ 片親監護 523人(61.8%) 隔代監護 172人(20.3%) 混合監護 152人(17.9%)	片親監護61.8% 隔代監護20.3%
5	「農村留守児童の成長と発展に関する調査報告」(陸業 2010)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 隔代監護(祖父母+子) 寄養監護(親戚+子) 自己監護(子どものみ)	留守100	①農村留守児童のみ 隔代監護 88人(88%) 寄養監護 11人(11%) 自己監護 1人(1%)	隔代監護88%
6	「黒竜江省の貧困地域の農村留守児童の家庭教育に関する研究」(肖悦・劉秀岩・温照洋・楊洋 2019)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 片親教育型(片親+子) 隔代教育型(祖父母+子) 寄養教育型(親戚+子)	留守106	①農村留守児童のみ 片親教育型(不明確) 隔代教育型 88人(83.0%) 寄養教育型(不明確)	隔代教育83.0% 片親教育(不明確)
7	「農村留守児童の隔代教育の現状及び教育上の助言-羅平県阿崗鎮を例として-」(王自坤 2016)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 隔代看護(祖父母+子) 叔父母看護(親族+子) 自己監護(子どものみ)	留守120	①農村留守児童のみ 隔代看護 114人(95.0%) 叔父母看護 4人(3.3%) 自己監護 2人(1.7%)	隔代看護95.0%
8	「農村留守児童の隔代教育の問題に関する研究-穿山町Y村を例に」(華婷婷 2021)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童のみ 父親監護(父親+子) 母親監護(母親+子) 隔代監護(祖父母+子) 親戚監護(親戚+子)	留守100	①農村留守児童のみ 父親監護 8人(8%) 母親監護 20人(20%) 隔代監護 51人(51%) 親戚監護 21人(21%)	片親監護28.0% 隔代監護51%
9	「農村留守児童の心理健康状態及びその影響要因に関する研究」(王偉・華恒偉・郭穎・段征宇 2014)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 母親監護(母親+子) 父親監護(父親+子) 隔代監護(祖父母+子) 同世代監護(兄弟+子) ②非留守児童	留守952 非留守952	①農村留守児童 母親監護 305人(32.1%) 父親監護 232人(24.4%) 隔代監護 247人(25.9%) 同世代監護 168人(17.6%) ②非留守児童	片親監護56.5% 隔代監護25.9%
10	「家庭教育の方法が留守児童の心理健康に与える影響」(黄艶幸・李玲 2012)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 母親監護(母親+子) 父親監護(父親+子) 隔代監護(祖父母+子) 同世代と自己監護(兄弟+子/子どものみ) ②非留守児童 ③元留守児童	留守570 非留守133 元留守110	①農村留守児童 母親監護 239人(41.9%) 父親監護 145人(25.4%) 隔代監護 136人(23.9%) 同世代と自己監護 50人(8.8%) ②非留守児童 ③元留守児童	片親監護67.3% 隔代監護23.9%
11	「平涼市における留守小学生の怪我に影響する要因の多重対応分析」(崔紅・賈喜平・劉濤 2023)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 同世代監護(兄弟+子) 他の監護(親戚等+子) ②非留守児童	留守1138 非留守2631	①農村留守児童 片親監護 669人(58.7%) 隔代監護 364人(32.0%) 同世代監護 23人(2.0%) 他の監護 82人(7.3%) ②非留守児童	片親監護58.7% 隔代監護32.0%
12	「貴州省思南県における農村留守中学生の心理健康状態分析」(謝琴紅・楊映萍・仲磊 2011)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 隔代監護(祖父母+子) 自己監護(子どものみ) 上世代監護(親戚等+子) ②非留守児童	留守1108 非留守500	①農村留守児童 隔代監護 786人(70.9%) 自己監護 56人(5.1%) 上世代監護 266人(24.0%) ②非留守児童	隔代監護70.9%
13	「異なる保護者タイプの留守児童と一般児童の心理発達状況の比較研究」(高亜兵 2008)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 同世代監護(兄弟+子) 上世代監護(親戚等+子) ②非留守児童	留守756 非留守623	①農村留守児童 片親監護 281人(37.2%) 隔代監護 374人(49.5%) 同世代監護 52人(6.9%) 上世代監護 49人(6.4%) ②非留守児童	片親監護37.2% 隔代監護49.5%

14	「留守児童の科学的素養の問題に関する浅析」 (劉宏雁 2011)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 隔代監護(祖父母+子) 自己監護(子どものみ) 父母同世代監護(親戚等+子) ②非留守児童	留守241 非留守126	①農村留守児童 隔代監護 193人(80.2%) 自己監護 10人(4.0%) 父母同世代監護 38人(15.4%) ②非留守児童	隔代監護80.2%
15	「農村留守児童の監護問題と犯罪の実証研究」 (董士曇・李梅 2010)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 長輩監護(親戚+子) 同輩監護(兄弟+子) 自己監護(子どものみ) 他の監護(逆向監護) ②非留守児童	留守500 非留守500	①農村留守児童 片親監護 332人(66.4%) 隔代監護 129人(25.81%) 長輩監護 15人(2.87%) 同輩監護 12人(2.46%) 自己監護 8人(1.64%) 他の監護 4人(0.82%) ②非留守児童	片親監護66.4% 隔代監護25.81%
16	「山東省の学齢前の農村留守児童の家庭養育状況に関する調査分析」 (張晶晶・李士雪・徐凌忠・蓋若琰・惠重茹 2015)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) ②非留守児童	留守269 非留守466	①農村留守児童 片親監護 125人(46.5%) 隔代監護 144人(53.5%) ②非留守児童	片親監護46.5% 隔代監護53.5%
17	「養育方法が留守児童の主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究-彭水のある小学校を例に」 (馮露霜・陳麗 2019)	祖父母の単独で育児と二世帯で共同	①農村留守児童 母親撫養(母親+子) 父親撫養(父親+子) 隔代撫養(祖父母+子)と(祖父母+片親+子) 親族撫養(親族+子) ②非留守児童	留守278 非留守73	①農村留守児童 母親撫養 134人(48.2%) 父親撫養 25人(9.0%) 隔代撫養 98人(35.3%) 親族撫養 21人(7.5%) ②非留守児童	片親撫養57.2% 隔代撫養35.3%
18	「社会資本の視点から見た農村留守児童の隔代教育問題の分析-南通市A村の調査に基づいて」 (沙莎・苗春鳳 2023)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 親戚監護(親戚+子) 他の監護 ②非留守児童	留守58 非留守34	①農村留守児童 片親監護 15人(25.9%) 隔代監護 31人(53.4%) 親戚監護 7人(12.1%) 他の監護 5人(8.6%) ②非留守児童	片親監護25.9% 隔代監護53.4%
19	「隔代教養下の農村留守児童の成長状況に関する研究-六安の農村地域に」 (孫一葦 2013)	祖父母の単独で育児	①農村留守児童 片親監護(片親+子) 隔代監護(祖父母+子) 上世代監護(親戚等+子) 同世代監護(兄弟+子) ②非留守児童	留守424 非留守149	不明確	不明確

第2項 シングルペアレントの児童は農村留守児童ではない

国家統計局、国際連合児童基金（UNICEF）、及び国際連合人口基金（UNFPA）が共同で発表した報告書「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」には、シングルペアレントの児童は含まれていない。中国農村において、農村留守児童は、父母もしくは父母一方が外出して労働する児童を指す。しかし、未婚での出産、離婚、または配偶者の死別などの理由で形成される農村のシングルペアレントに生活する児童の状況は、さらに複雑である。これらの家庭で片親が外出して労働する場合、これらの児童は形式上、農村留守児童に属しているように見える。しかし、彼らの生活環境は両親が一時的に外出し労働する両親家庭の留守児童とは大きく異なる。後者の場合、児童は将来的に両親と再会できることが期待される。シングルペアレントの児童は一方の親が永続的に不在である状況に直面している。このようなシングルペアレントが児童に対して負の影響を与えることは、多くの研究によって証明されている（柴江 2020；龍蚩・袁嫚 2020；楊璐 2019）。

「2020年中国の児童人口状況の事実とデータ」のように農村留守児童であることを前提にした場合には片親と留守児童という形態が所要な農村留守児童の居住様式であることが確かであるとしても、片親と児童が共に住んでいる場合には、それがシングルペアレントの児童であるのか、留守児童であるのかは居住様式からは区別できない。このことは農村留守児童を扱う研究のほとんどでシングルペアレント家庭を除外できていないという問題を引き起こしている。

この43編の論文の中で、1編のみがシングルペアレントの児童を明確に除外している（趙景欣他 2016）。4編の論文では、シングルペアレントの児童が農村留守児童に含まれ

ている（袁鳳琴・袁真強 2010；于佳琪 2023；董蔚然・鍾景訊 2023；沙莎・苗春鳳 2023）。残りの論文はシングルペアレントの児童を除外したかどうかを明示していないため、このグループを含んでいる可能性が存在している。シングルペアレント家庭の児童を研究対象として取り入れることは、その子どもたちに見られる影響が祖父母の存在によるものなのか、それともシングルペアレント家庭の状況自体によるものなのかを明確に区別することを難しくしていると考えられる。

第3項 父母の外出労働する地理的範囲

43編のうち8編の論文において、親の外出労働の地理的範囲は通常「父母または父母の一方が農村地域から他の地域への移動」（王偉他 2014；馮露霜・陳麗 2019；孫羽燕 2014）、「父母または父母の一方が他の地域へ出稼ぎに行く」（袁鳳琴・袁真強 2010；董蔚然・鍾景訊 2023；陸叶 2010）、または「他の地域での労働または商売」（謝芳・楊齊 2015；司永芳 2012）のように、他の地域へ移動したことだけが問題とされている。43編の論文中、1編のみが親の外出労働の地理的範囲を「農村から都市へ」と明確に定義している（肖悦他 2020）。残りの論文は、親の外出労働の地理的範囲については、明示していない。

しかし、この定義における「他の地域」とは具体的に都市、県、鎮、それとも他の農村地域（中国の行政区分は、省>市>県>鎮、郷）のどのレベルの移動を指すのかが明確にされていない。このような曖昧な定義は分析結果を不正確にする可能性がある。たとえば、親が隣接する農村地域や鎮、県で働いている場合、彼らは定期的に帰宅し、子どもの生活や教育にある程度参加することが可能である。これは、親が故郷から遠く離れた都市地域で長期間働く状況とは対照的であり、後者の場合、子どもは長期間にわたって祖父母によって単独で育児されることになる。親の外出する地理的範囲の定義が不明確であるため、親が育児にある程度参加している可能性があり、これは祖父母による単独育児のモデルが農村留守児童に与える実際の影響を隠蔽している可能性があると考えられる。

第3章第1節第2項「祖父母の育児への参加度」で示したように、7編の論文が隔世育児を「祖父母が主要な養育者となるモデル」と定義していた。この場合、片親が育児に部分的に関与する可能性を示唆している。また、第3章第3節第1項「多くの農村留守児童も祖父母と片親と生活している」では、18編の論文には、「祖父母及び父母の一方と共同居住する」居住様式が、「片親のみと居住する」や「祖父母のみと居住する」の категорияに誤って分類された可能性がかなり高いことが確認できている。このような分類の誤りは、祖父母のみによる育児とされる分類内で、実際には片親がある程度育児に参加している可能性を示唆している。43編の論文のうち、25編が祖父母のみによる育児モデルに片親の介入が見られることを示している。そして、43編の論文の中で1編だけが、親の外出労働の地理的範囲を「農村から都市へ」と明確にしている。これらの事実は、農村留守児童問題を扱う研究の内、隔世育児の問題を指摘する論文の多くが、父母の養育の影響を適切に排除できていないことを示している。

第4節 農村留守児童と非留守児童との比較

第1項 農村非留守児童も隔世育児である

43編の論文の中で、19編は農村留守児童と非留守児童とを比較している（図表9）。12編の論文では、居住様式に基づき農村留守児童を「片親監護、隔代監護、同代監護、親戚監護」などのいくつかの categoria に分類し、これらの categoria に属する農村留守児童と非留守児童を比較しているが、非留守児童に関しては分類せず、一つのグループとして比較している（王偉他 2014；黄艷萃・李玲 2012；霍紅他 2023；謝琴紅他 2011；高亜兵

2008 ; 劉宏雁 2011 ; 董士曇・李梅 2010 ; 沙莎・苗春鳳 2023 ; 孫一葦 2013 ; 張晶晶他 2015 ; 馮露霜・陳麗 2019 ; 司永勞 2012)。そして、6 編の論文では「農村留守児童－祖父母育児」と「非留守児童－父母育児」とを対立的なモデルとして扱っている（侯曼 2019 ; 韓志紅・郭智慧 2016 ; 琚曉燕・張晨軒 2022 ; 汪采玉・賈勇宏 2022 ; 程琳 2014 ; 任潤 2013)。また、1 編の論文では非留守児童の祖父母育児の状況を考慮し、祖父母育児下の農村留守児童と祖父母育児下の農村非留守児童を比較している（李倩玉 2016)。

図表9：各研究における農村留守児童と農村非留守児童の人数と比率

順番	文献名（著者・発表年）	研究対象 （農村留守児童）	比較対象 （農村非留守児童）
1	「農村留守児童の心理健康状態及びその影響要因に関する研究」 （王伟・肇恒偉・郭穎・段征宇 2014）	母親監護（母親＋子） 父輩監護（父親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 同世代監護（兄弟＋子）	農村非留守児童
2	「家庭教育の方法が留守児童の心理健康に与える影響」 （黄艶苹・李玲 2012）	母親監護（母親＋子） 父輩監護（父親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 同世代と自己監護（兄弟＋子／子どものみ）	農村非留守児童
3	「平涼市における留守小学生の怪我に影響する要因の多重対応分析」 （霍紅・賈喜平・劉清 2023）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 同世代監護（兄弟＋子） 他の監護（親戚等＋子）	農村非留守児童
4	「貴州省思南県における農村留守中学生の心理健康状態分析」 （謝琴紅・楊映萍・仲磊 2011）	隔代監護（祖父母＋子） 自己監護（子どものみ） 上世代監護（親戚等＋子）	農村非留守児童
5	「異なる保護者タイプの留守児童と一般児童の心理発達状況の比較研究」 （高亜兵 2008）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 同世代監護（兄弟＋子） 上世代監護（親戚等＋子）	農村非留守児童
6	「留守児童の科学的素養の問題に関する浅析」 （劉宏雁 2011）	隔代監護（祖父母＋子） 自己監護（子どものみ） 父母同世代監護（親戚等＋子）	農村非留守児童
7	「農村留守児童の監護問題と犯罪の実証研究」 （董士曇・李梅 2010）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 長輩監護（親戚＋子） 同輩監護（兄弟＋子） 自己監護（子どものみ） 他の監護（逆向監護）	農村非留守児童
8	「社会資本の視点から見た農村留守児童の隔代教育問題の分析-南通市A村の調査に基づいて」 （沙莎・苗春鳳 2023）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 親戚監護（親戚＋子） 他の監護	農村非留守児童
9	「隔代教養下の農村留守児童の成長状況に関する研究-六安の農村地域例に」 （孫一葦 2013）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子） 上世代監護（親戚等＋子） 同世代監護（兄弟＋子）	農村非留守児童
10	「山東省の学齢前の農村留守児童の家庭養育状況に関する調査分析」 （張晶晶・李士雪・徐凌忠・蓋若琰・惠亜茹 2015）	片親監護（片親＋子） 隔代監護（祖父母＋子）	農村非留守児童
11	「養育方法が留守児童の主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究-彭水のある小学校を例に」 （馮露霜・陳麗 2019）	母親撫養（母親＋子） 父親撫養（父親＋子） 隔代撫養（祖父母＋子）と （祖父母＋片親＋子） 親族撫養（親族＋子）	農村非留守児童
12	「隔代教育が農村留守児童の社会化に与える影響に関する研究-西安市の農村のS中学校を例に-」 司永芳2012	隔世育児（祖父母＋子）	農村非留守児童
13	「生態系の視点から見た隔代教育が農村留守児童の社会化に及ぼす影響-陝西省太白県を例として-」 （侯曼・武敏娟・任旭 2019）	隔代教育（祖父母＋子）と （祖父母＋片親＋子）	父母育児 （両親＋子）

14	「隔代扶養が農村児童の孤独感及び心理健康に与える影響」 (韓志紅・郭智慧 2016)	父母外出労働下の隔世養育 (祖父母+子) 父母一方外出労働下の隔世養育 (祖父母+片親+子)	父母養育 (両親+子)
15	「隔代教養が農村留守児童の社会性発達の影響-父母育児の調整機能-」 (琚曉燕・張晨軒 2022)	完全隔世教養 (祖父母+子) 非完全隔世教養 (祖父母+片親+子)	完全父母教養 (両親+子)
16	「隔代扶養が農村留守児童の社会化に与える影響に関する研究-2013-2014学年の中国追跡調査の基礎データに基づいて-」 (汪采玉・賈勇宏 2022)	隔代養育(祖父母+子)	父母育児 (両親+子)
17	「隔代養育が農村留守児童の人間関係に及ぼす影響についての研究-松原市宁江区孫喜村を例に-」 (程琳 2014)	隔代養育(祖父母+子)	父母育児 (両親+子)
18	「隔代教養が農村留守児童の行動習慣に及ぼす影響に関する研究」 (任潤 2013)	隔代教養(祖父母+子)	父母育児 (両親+子)
19	「隔代親和と農村留守児童の積極的感情と消極的感情との関係:友情の質の調整効果」 (李倩玉 2016)	両親外出労働下の隔世育児 (祖父母+子)	非留守児童 (祖父母+両親+子)

しかし、農村における一般的な現象として、非留守児童も祖父母と生活し、祖父母が両親と協力して孫の養育に当たっている(図表10)。農村において非留守児童で祖父母が育児に関与している場合、それも「隔代育児」と称されることがある(広義における隔世育児)。したがって、隔世育児は農村留守児童に限らず、非留守児童にも見られる現象であると捉える必要がある。

図表10：農村児童の居住様式	
農村留守児童	父親と留守 父親、祖父母と留守 母親と留守 母親、祖父母と留守 祖父母と留守 親戚などと留守 子ども独自留守
農村非留守児童	父母と居住 父母、祖父母と居住

43編の論文の中で、農村留守児童と非留守児童を比較しているものは18編ある。しかし、これらの中で、農村留守児童の隔世育児と非留守児童の隔世育児を比較分析しているのは李倩玉(2016)の論文1編のみである。この論文では、父母の両方が共に外出労働している農村留守児童310名(祖父母と子どもで構成される)と、祖父母と両親が共に育児を行っている非留守児童257名を比較し、祖孫関係がこれら2つのグループの児童の情緒にどのように影響するかを研究している。研究は、良好な祖孫関係が両グループの児童の情緒に肯定的な影響を与え、子どもの肯定的な情緒を顕著に予測し、否定的な情緒を逆予測できることを明らかにするものであり(李倩玉2016)、祖父母による育児と父母による育児を対立的に論じない場合、隔世育児はより肯定的に評価される可能性があることが示唆される。

43編の論文の中で、農村留守児童の隔世育児と非留守児童の隔世育児を比較分析した研究はわずか1編に過ぎない。現在、農村留守児童問題は一般的に隔世育児に帰結されが

ちだが、それには二つの問題が存在する。第一に、農村留守児童が直面する問題は彼らに特有のものか、それとも農村児童全体が共有する問題なのか、つまり、非留守児童も農村留守児童が直面する同様の問題に直面しているのか、という問題である。第二に、隔世育児問題は農村留守児童に限ったことなのか、それともすべての農村児童に広く存在するのか、という問題である。農村留守児童と非留守児童の隔世育児に関する比較分析を行った研究が 1 編のみであるため更なる検討が必要ではあるが、祖父母が養育に参加すること自体は肯定的な影響を与えるであろうことは十分に予想できる結論である。それをふまえると、農村留守児童問題は農村児童全体の問題であり、隔世育児のうち祖父母のみの養育が農村で顕著であるために、農村留守児童の問題が隔世育児によるものであると分析上誤認されている可能性は高いといえよう。今後は、農村留守児童における隔世育児の状況にのみ注目するのではなく、非留守児童における隔世育児の問題も考慮に入れる必要がある。

第 2 項 農村留守児童と農村非留守児童の人数と割合

国家統計局、国連児童基金会（UNICEF）及び国連人口基金（UNFPA）が共同発表した 2000 年から 2020 年までの「中国の児童人口状況の事実とデータ」調査報告によると、2000 年、2010 年、2015 年、2020 年の農村留守児童の割合は、それぞれ農村児童全体の 11.3%、39.5%、29.3%、37.8%であった。これは、農村児童に占める農村留守児童の割合が農村児童の総数が一貫して減少していくなかで高止まりした結果、近年では農村児童の約 4 割を留守児童が占めるに至ったことを示している。また、一部の省では、農村留守児童の割合が非常に高く、地域の農村児童の半数以上、あるいはほぼ半数を占めている。例えば、重慶市、広西チワン族自治区、河南省、貴州省などである。

43 編の論文の中で、11 編は全ての調査対象を農村留守児童と非留守児童に明確に区別している（王偉他 2014；黄艶苹・李玲 2012；霍紅他 2023；謝琴紅他 2011；高亜兵 2008；劉宏雁 2011；董士曇・李梅 2010；沙莎・苗春鳳 2023；孫一葦 2013；張晶晶他 2015；馮露霜・陳麗 2019）。この 11 編の論文のうち、8 編では調査されたすべての農村児童（農村留守児童及び非留守児童を含む）の中で、農村留守児童の割合が国家統計局が公表する約 35%のデータを著しく超えていることを示している。具体的には、2 編の論文で農村留守児童の割合はそれぞれ 30.2%と 36.6%で、これは国家統計局の 35%のデータに近い。3 編の論文では、農村留守児童の割合が 50%、50%、54.8%と 50%から 60%の間にあるが、割合が 50%である 2 つの論文は留守児童と非留守児童の数を揃えたものであり、農村留守児童比率の参考にはならない。他の 6 編の論文では、農村留守児童の割合が 60%を超え、それぞれ 63%、65.7%、69%、70.1%、74%、79.2%に達し、これはこれらの地域で農村留守児童の数が非留守児童の数をはるかに上回っていることを意味している。

11 編の論文のうち、7 編での農村留守児童が農村児童総人数の 50%を超える割合を占めており、これらの地域においては農村留守児童が農村児童を代表する主要な集団となっている。農村留守児童の高い割合は、父母の経済的理由による移動が避けがたい貧困状態に地域があることを意味するため、地域の農村児童が深刻な貧困問題に直面していることを示唆しており、農村留守児童の問題が貧困問題と密接に関連していることを示している。

これらの研究において、農村留守児童と非留守児童を比較分析することが一般的であり、その結果、農村留守児童が多く課題と挑戦に直面していることが明らかになっている。しかし、これらの問題を単純に彼らの留守児童であるという性質に由来すると考えてしまうと、背後にあるより複雑な経済的要因を見落とすことになる。したがって、農村留守児童の問題を貧困問題から分離して議論することは現実的ではない。農村留守児童に関する研究を行う際には、調査地域全体の貧困の影響も同時に考慮する必要がある。

図表11：各研究における農村留守児童と農村非留守児童の人数と比率

順番	文献名（著者・発表年）	研究対象	総人数 (人)	人数（人）と割合(%)
1	「農村留守児童の心理健康状態及びその影響要因に関する研究」 (王伟・肇恒偉・郭穎・段征宇 2014)	①農村留守児童 母親監護（母親+子） 父輩監護（父親+子） 隔代監護（祖父母+子） 同輩監護（兄弟+子） ②非留守児童	1904	留守952 (50%) 非留守952 (50%)
2	「家庭教育の方法が留守児童の心理健康に与える影響」 (黄艶萍・李玲 2012)	①農村留守児童 母親監護（母親+子） 父輩監護（父親+子） 隔代監護（祖父母+子） 同輩と独自監護（兄弟+子 / 子どものみ） ②非留守児童 ③元留守児童	813	留守570 (70.1%) 非留守133 (16.4%) 元留守110 (13.5%)
3	「平涼市における留守小学生の怪我に影響する要因の多重対応分析」 (霍紅・賈喜平・劉濤 2023)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） 同代監護（兄弟+子） 他の監護（親戚等+子） ②非留守児童	3769	留守1138 (30.2%) 非留守2631 (69.8%)
4	「貴州省思南県における農村留守中学生の心理健康状態分析」 (謝琴紅・楊映萍・仲磊 2011)	①農村留守児童 隔代監護（祖父母+子） 独自監護（子どものみ） 上代監護（親戚等+子） ②非留守児童	1608	留守1108 (69%) 非留守500 (31%)
5	「異なる保護者タイプの留守児童と一般児童の心理発展状況の比較研究」 (高亜兵 2008)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） 同代監護（兄弟+子） 上代監護（親戚等+子） ②非留守児童	1379	留守756 (54.8%) 非留守623 (45.2%)
6	「留守児童の科学的素養の問題に関する浅析」 (劉宏雁 2011)	①農村留守児童 隔代監護（祖父母+子） 独自監護（子どものみ） 父母同輩監護（親戚等+子） ②非留守児童	367	留守241 (65.7%) 非留守126 (34.3%)
7	「農村留守児童の監護問題と犯罪の実証研究」 (董士墨・李梅 2010)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） 長輩監護（親戚+子） 同輩監護（兄弟+子） 独自監護（子どものみ） 他の監護（逆向監護） ②非留守児童	1000	留守500 (50%) 非留守500 (50%)
8	「社会資本の視点から見た農村留守児童の隔代教育問題の分析-南通市A村の調査に基づいて」 (沙莎・苗春鳳 2023)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） 親戚監護（親戚+子） 他の監護 ②非留守児童	92	留守58 (63%) 非留守34 (37%)
9	「隔代教養下の農村留守児童の成長状況に関する研究-六安の農村地域例に」 (孫一葦 2013)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） 上代監護（親戚等+子） 同輩監護（兄弟+子） ②非留守児童	573	留守424 (74%) 非留守149 (26%)
10	「山東省の農村学齢前の留守児童の家庭状況に関する調査分析」 (張晶晶・李士雪・徐凌忠・蓋若琰・惠亜茹 2015)	①農村留守児童 片親監護（片親+子） 隔代監護（祖父母+子） ②非留守児童	735	留守269 (36.6%) 非留守466 (63.4%)
11	「養育方法が留守児童の主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究-彭水のある小学校を事例に」 (馮露露・陳麗 2019)	①農村留守児童 母親撫養（母親+子） 父親撫養（父親+子） 隔代撫養（祖父母+子）と （祖父母+片親+子） 親族撫養（親族+子） ②非留守児童	351	留守278 (79.2%) 非留守73 (20.8%)

第5節 対象文献のサンプル

43編の論文の調査範囲は、主に陝西、四川、山東、安徽、貴州、河南、江蘇、浙江の8つの省に集中していた。しかし、全国のデータによると、農村留守児童は主に河南、四川、広西、貴州、湖南、江西、安徽、広東に集中している。論文の調査範囲と農村留守児童の分布状況を重ね合わせると、四川、貴州、河南、安徽などの農村留守児童の多い省は農村留守児童研究でも取り上げられていることが確認できる。これは、これらの地域が学術研究で注目されていると同時に、実際に農村留守児童が集中している地域であることを示している。しかし、広西、湖南、江西などの省は、多数の農村留守児童がいるにも関わらず、それに見合った学術的な注目を受けていないのが現状である。すべての重要地域を網羅していないため、この研究結果が中国の農村地域における留守児童の実際の状況を反映しているとは限らない可能性がある。

また、分析された43の論文の中で、隔世育児が農村留守児童に与える影響に関する研究は、調査対象の選定に二つの主要な方法を用いている。第一に、農村地域の幼稚園また小中学校を訪れ、学校を通じて調査対象と接触して児童を分類し、留守児童と非留守児童を特定する方法であり、これは多くの文献で採用されている(霍紅他 2023; 董蔚然・鍾景迅 2023; 許双会他 2022; 汪采玉・賈勇宏 2022; 劉貝貝他 2019; 馮露霜・陳麗 2019; 樊翠娟 2010; 韓志紅・郭智慧 2016; 侯曼他 2019; 高亜兵 2008; 謝琴紅 2011; 王偉他 2014; 黄艷萃・李玲 2012; 趙景欣 2016; 李倩玉 2019; 董士曇・李梅 2010; 張晶晶他 2015; 琚曉燕・張晨軒 2022; 于佳琪 2023; 袁鳳琴・袁真強 2010; 陸叶 2010; 肖悦他 2020; 李維亞・張豪 2014; 高文揚 2021; 孫一葦 2013; 趙尉 2011; 程琳 2017; 司永芳 2012; 周考 2016)。第二に、学校を通さずに遠隔の農村コミュニティに調査に入ることによって農村留守児童の状況を調査する方法である(張小屏 2018; 劉馨月他 2021; 劉宏雁 2011; 韋婷婷 2021; 王自坤 2016; 秦敏 2015; 沙莎・苗春鳳 2023; 紀紅娟 2012; 鮑一帆 2022; 謝芳・楊齊 2015; 孫羽燕 2014; 任潤 2013; 周国雷 2017; 劉芳 2018)。しかし、どちらの方法を採用しても、全ての研究は農村地域を主要な調査地域としている。

しかし実際には、農村留守児童の分布は、学界や社会一般が通常考える「主に遠隔地の農村や辺境の学校に集中している」という見解とは異なる。羅国芬・馬春冉(2021)によると、中国の県レベルの地域では、質の高い教育資源が主に県城や中心集落などの地域に集中している。そのため、経済的に余裕のある家庭は、農村留守児童を地元で教育の質が高い学校に送る傾向がある。その結果、農村地域では、多くの農村留守児童が実際には県城や中心集落の学校で教育を受けている。中国では、義務教育段階の農村留守児童のほぼ半数が、県城や中心集落の学校で学んでいる(羅国芬・馬春冉 2021)。こういった事実もまた農村留守児童研究のデータが、質の高い教育を受けられない農村留守児童だけを調査対象にしてきたことを示唆している。特に農村地域の学校に通う児童を対象に調査を行った研究の場合には、経済的に余裕がある子どもたちが調査地域外の学校に通っている実態を踏まえれば、農村地域の学校に集中した特に困窮した農村留守児童を調査対象として選んでいることになるためである。

これら43編の論文において、すべての研究が農村地域の留守児童を調査対象とし、その中には特に遠隔地や後進的な農村地域に焦点を当てたものもある。しかし、これらの研究には、県城で教育を受けている農村留守児童をほとんど考慮に入れていないものも多数存在している。農村留守児童の通学実態を考慮せず農村地域の学校を対象として調査を行っている研究に関しては、サンプル選択に偏りがある可能性が高いことを十分に考慮して参照する必要がある。また、実際には中心集落に住み込んで学校に通う農村戸籍の留守児童も存在し、そういった子どもたちは経済的に恵まれ社会的に成功する確率も高いが定義

上農村留守児童に含まれ、これまでの研究の調査対象から漏れていることにも触れておく。本研究が隔世育児の影響を再検討するものであることからこれ以上の言及は行わないが、農村戸籍で中心集落に住む留守児童が研究対象から外れていることは、農村留守児童を問題化する研究の結論をより強調することにつながっているであろう。

第6節 小括

本章第1節では、「家族構成と居住様式」、「祖父母の育児への参加度」、「父母もしくは父母一方の外出労働」を含む三つの側面から隔世育児の分類を検討し、四種類の隔世育児の分類例を特定した。その後、その中の二つのカテゴリーを一つに統合し、四つの隔代育児のカテゴリーを三つに簡素化した。その上で、これら三つの異なる状況下で農村留守児童に及ぼす影響について詳細な分析を行った。その結果、「祖父母のみによる育児」と「祖父母が育児を行い、片親も場合によっては育児に参加する」という二つのタイプは、主に否定的な影響を及ぼしていると結論付けられていることが明らかになった。それに対し、「祖父母のみによる育児」と「二世帯による共同育児」とを比較した研究では、肯定的または中立的な影響とした研究が主流である。これは、祖父母が養育に関わっていることに悪影響があるというわけではなく、父母の一方が存在し、育児に参加していることが決定的な役割を果たす可能性があることを示している。

第2節では、祖父母の養育スタイル、農村留守児童の家庭関係、及び農村留守児童の家族構造に焦点を当て、否定的な影響を報告する43編の論文に対して分析を実施した。その結果、農村留守児童の学業成績において、母親の存在は重要な中間変数であることが明らかになった。また、農村留守児童が抱える否定的現象を祖父母の「甘やかし」や「時代遅れの伝統的な育児観」とした研究は、偏見に基づいて研究結果とは無関係にこれらを農村留守児童問題の原因として記述するという問題が見られた。研究として客観的にこれらの影響を確認するのであれば、「甘やかし」の具体的な定義や表現形式、伝統的育児観と科学的育児観の違いと境界線を明確にし、その影響を把握できる調査をまずは行うことが必要である。農村留守児童が抱える否定的現象と祖父母の養育スタイルとの関連はこれまでの研究で十分に明らかにされていない点であり、厳密な論証を必要とする。家庭関係の面では、父母の不在が農村留守児童の情緒的ニーズに答えられないことを必ずしも意味するわけではなく、祖孫間の良好な関係は農村留守児童によい影響を与えていた。隔世育児が農村留守児童に及ぼす影響については、一概に断定することはできず、祖父母の年齢、性別、家族の人口規模、年収、児童の年齢などの媒介変数の考慮が必要であるとされる。

第3節では、農村留守児童とされる研究対象についての分析を行った。その結果、居住様式に基づいて研究対象を分類した19編の論文の内、実に18編に分類上の誤りが存在する可能性が高いことが明らかになった。具体的には、祖父母と片親が共同で育児する分類が存在しないために、「祖父母及び父母の一方と共に生活する」という居住様式が、「母親と単独で居住する」や「祖父母と単独で居住する」のカテゴリーに誤って分類される可能性がかなり高いことが確認できている。加えて、多くの論文が議論している農村留守児童の中にはシングルペアレントの児童が含まれているものの、シングルペアレントの児童は農村留守児童の定義には当てはまらないことも問題である。研究対象の誤分類や混在は、農村留守児童の問題とされているもののなかにシングルペアレントの養育などの問題が混在させ、非留守児童も祖父母に養育されていることを隠蔽することで祖父母が養育することの影響を適切に評価することを困難にしている。

第4節では、農村留守児童と非留守児童との比較をした研究を分析し、この二つの集団の隔世育児を比較する研究は1編のみであり、農村留守児童が直面する問題が留守児童

に特有のものか、あるいは隔世育児の問題とされてきた問題が農村児童全体に共通の問題についての議論が不足している。そのため、隔世育児の問題を農村留守児童だけに限定せず、全体の農村児童に対する問題として捉え直す必要がある。また、11編の論文のうち、7編で農村留守児童が全体の50%以上を占めており、これらの地域で農村留守児童が主要な集団になっていること、そして留守児童問題が深刻な貧困問題と密接に関連していることが予期される。農村留守児童問題を検討する際には、地域全体の貧困問題などより複雑な経済的要因を考慮する必要がある。

第5節では、対象文献における調査対象地域の省は、実際の農村留守児童の分布と重なり合いながらも、調査対象から外れている省が存在していることを指摘した。また、研究手法としては、農村地域の学校、あるいは農村コミュニティを介したものがすべてであったが、学校を通じた場合には中心集落の学校に通う留守児童などより経済的に余裕が存在する児童が農村留守児童から排除されるという問題を含んでいた。また、定義上は農村留守児童となる農村戸籍で県城や中心集落の学校で教育を受ける農村留守児童を含めている研究がなく、このことも農村留守児童が問題となる方向に偏ったサンプル選択となっている可能性がある。

終章 中国における「留守児童問題」への批判的検討

第1節 祖父母のみによる育児モデルに片親が混じっていること

「農村留守児童問題」は、従来の研究でしばしば隔世育児が原因であるとされ、一般的な見解として祖父母による養育スタイルが不適切であることにより生じるとされている。しかし、隔世育児が農村留守児童に与える影響について分析した43の論文を検討する中で、隔世育児の概念規定の食い違い、研究対象の分類の混乱、および親が外出労働の地理的範囲の定義の不明確さなどが、本研究を通じて明らかになった。特に、農村留守児童研究において、祖父母と片親が共同で養育する居住様式がほとんどの研究では考慮されず、祖父母が養育する留守児童と父母が養育する非留守児童という実態とは異なる分類で隔世育児が議論されていたことは、祖父母の養育の影響を適切に評価する上で重大な問題となっていることを指摘したことは本研究の重要な結論のひとつである。すなわち、これまでの研究では、農村留守児童だけが祖父母による養育を受けているというモデルで考えられていたものの、実際には非留守児童に関してもある程度祖父母による養育を受けていることを考慮して研究をデザインすることが求められる。また、留守児童に対してどの程度親が養育に関わっているのかに関しては研究で考慮されてこなかったことも明らかになった。これらの結論から、農村留守児童に与えられる影響を評価する際に、親の参加度が過小評価され、祖父母の養育責任が過大評価される可能性があることを指摘できる。祖父母のみによる育児モデルと実際には片親が養育に参加するという実態とのずれが、研究上で隔世育児が農村留守児童に及ぼす真の影響の評価を妨げていたことは特筆に値する。

したがって、今後の研究で農村留守児童に対する祖父母の具体的な影響を正確に評価するためには、隔世育児の定義を祖父母のみによる養育モデルに厳格に限定し、親の育児参加を明確に排除することが必要である。さらに、祖父母のみによる養育モデルの定義を明確にすることが極めて重要である。これには祖父母と孫の共同居住期間、子どもと親の面会頻度、親の外出労働の地理的範囲などの客観的指標を考慮に入れることが含まれる。これらの指標を明確にすることで、隔世育児が農村留守児童に与える具体的な影響をより正確に理解することができる。

第2節 祖父母の養育スタイルへの検討

調査した43編の隔世育児研究では、多くの論文が祖父母の養育スタイルに多くの不適切な点があると指摘している。不適切であるとする内容には、祖父母の育児における養育重視と教育軽視、過度の甘やかし、時代遅れの育児観念の存在などが含まれる。そして、これらの要因が、農村留守児童が学業で困難に直面し、心理的健康問題や品行の問題を抱える主な原因であると考えられている。しかし、これらの結論は厳密な論証を欠いており、偏見に満ちた枠組みを実証的な根拠をもたないまま安易に結果の解釈に用いた研究が多数あることは、既に本研究で指摘したところである。そのため、現時点では隔世育児の負の影響を祖父母の養育スタイルに直接求めることは不適切であると考えられる。

さらに、隔世育児の負の影響を祖父母の養育スタイルに直接求めることは、多様で複雑な社会環境や家庭背景を無視していることも重大な問題である。具体的には、農村留守児童に隔世育児が及ぼす影響を検討する論文のうち、農村留守児童と非留守児童の比率を参照可能な研究のおよそ8割（両者のサンプル数を揃えているものを含めても6割強）の研究で、およそ5割から8割の子どもが農村留守児童となる特異な地域が対象とされていることが本研究を通じて明らかになった。こういった地域内ではむしろ例外的な非留守児童と比較が行われる場合には、その地域の主流にあたる農村留守児童の問題と貧困問題と切り離れた議論を行うことは非現実的である。農村地域の一部の恵まれた階層と比較した

結果、農村留守児童に何らかの問題が指摘できたとしても、それを農村留守児童という属性に起因することと考えることは適切とは言えない可能性が高い。農村留守児童の生活背景には、親の長期不在、貧困、教育資源の不足などが含まれる。これらの要因は祖父母の養育スタイルとは独立して、子どもに影響を与える可能性がある。

第3節 教育における祖父母の役割

分析された43編の論文のうち21編の論文が祖父母の育児における養育重視と教育軽視の傾向があることを指摘している。これは、農村留守児童の学習指導に関して祖父母の指導が不十分であるという指摘である。この指摘は、教育における祖父母の役割に対する高い期待を間接的に反映しており、祖父母には感情的な支援と生活上の支援だけでなく、子どもの教育過程に効果的に参加することも期待されていることを意味する。中国では、祖父母が教育の責任を負うべきだと一般に考えられており、この観念はしばしば学校の成績や教育成就と密接に関連している。一方、日本では家庭教育は学校教育とは異なる情操教育の側面を補うべきであり、学校教育の内容を直接補うものではないと、一般に考えられている。こういった文化差を加味するなら、家庭教育の役割として教育面を重視することがどの程度適切であるかに関しても、検討していく価値のある問題であろう。

第4節 今後の課題

本研究では、43編の論文を検討し、農村留守児童問題と隔世育児による問題を検討することで、調査対象に関する概念規定が一貫せず、確実な証拠のないまま農村留守児童の問題を祖父母の養育スタイルの問題としていることを明らかにし、農村に存在する貧困等の問題と農村留守児童問題が分離できないほど密接にかかわっていると指摘してきた。

しかし、本研究では、農村留守児童の問題とされるのはどのような指標であり、どの程度の影響があるのか、それらの影響とされている指標に祖父母の養育とは別のどのような要因の影響があり得るのか、などを具体的に検討するには至らなかった。今後の研究では、先行研究の分析において、農村留守児童の問題がどのようなメカニズムで生じ、どういった影響があると考えられるのかに関して、それが隔世育児の祖父母による養育スタイルに起因するものと考えられるのかを観点として精査をすることが必要である。また、本研究の知見を前提に厳密な概念規定を行った調査を行うことが必要である。

対象文献（43 編）

- 琚曉燕・張晨軒「隔代教養が農村留守兒童の社会性発達の影響—親の育児投入の調整機能に関する考察—」（中国語：隔代教养对农村儿童社会性发展的影响-兼论父母教养投入的调节作用）『中国青年社会科学』第 41 卷第 2 期，2022，pp.77-84。
- 王偉・肇恒偉・郭穎・段征宇「農村留守兒童の心理健康状態及びその影響要因に関する研究」（中国語：农村留守儿童心理健康状况及其影响因素研究）『現代予防医学』第 41 卷第 6 期，2014，pp.994-999。
- 王自坤「農村留守兒童の隔代教育の現状及び教育上の助言—羅平県阿崗鎮を例として—」（中国語：农村留守儿童隔代教育的现状及教育建议—以罗平县阿岗镇为例）『教育現代化』2016 年 1 月（上半月），2016，pp.164-167。
- 黄艶萃・李玲「家庭教育方法が留守兒童の心理健康に与える影響」（中国語：家庭教养方式对留守儿童心理健康的影响）『心理健康』第 9 卷第 2 期，2012，pp.31-34。
- 韓志紅・郭智慧「隔代撫養が農村兒童の孤独感及び心理健康に与える影響」（中国語：隔代抚养对农村儿童孤独感和心理健康的影响）『華南予防医学』第 42 卷第 2 期，2016，pp.167-170。
- 紀紅娟「留守兒童教育の問題及び対策—安徽九華山風景区九華郷を例に」（中国語：留守儿童教育问题及其对策分析—以安徽九华山风景区九华乡为例）『池州学院学報』第 26 卷第 3 期，2012，pp.100-102。
- 許双会・戴桂芬・王丹陽・張燕燕「隔代撫養下の農村学齡前兒童の単純肥満の発生状況に関する調査」（中国語：隔代抚养的农村留守学龄前儿童单纯性肥胖发生情况调查）『中国鄉村医薬』第 29 卷第 18 期，2022，pp.47-48。
- 侯曼・武敏娟・任旭「生態系の視点から見た隔代教育が農村留守兒童の社会化に及ぼす影響—陝西省太白県を例として—」（中国語：生态系统视角下隔代教育对农村留守儿童社会化的影响-以陕西省太白县为例）『現代小学校教育』第 35 卷第 8 期，2019，pp.85-90。
- 高亜兵「異なる保護者タイプの留守兒童と一般兒童の心理発達状況の比較研究」（中国語：不同监护类型留守儿童与普通儿童心理发展状况的比较研究）『中国特殊教育』2008 年第 7 期，2008，pp.56-60。
- 高文揚「隔代撫養が農村留守兒童に肯定的影響と教育提案—扶風県のある農村のインタビューに基づいて」（中国語：隔代抚养对农村留守儿童积极影响的探究与教育建议-基于扶风县某村的深度访谈）『南方論刊』2021 年第 11 期，2021，pp.52-54。
- 沙莎・苗春鳳「社会資本の視点から見た農村留守兒童の隔代教育問題の分析-南通市 A 村の調査に基づいて」（中国語：社会资本视角下农村留守儿童隔代教育问题探析-基于南通市 A 村的调查）『成都師範学院学報』第 39 卷第 5 期，2023，pp.59-68。
- 司永芳「隔代教育が農村留守兒童の社会化に与える影響に関する研究—西安市の農村の S 中学校を例に—」（中国語：隔代教育对农村留守儿童社会化影响的研究-以西安市农村 S 中学为例）華中農業大学修士論文，2012
- 謝琴紅・楊映萍・仲磊「貴州省思南県における農村留守中學生の心理健康状態分析」（中国語：贵州省思南县农村留守中学生心理健康状况分析）『中国学校衛生』第 32 卷第 4 期，2011，pp.468-469。
- 謝芳・楊齊「四川省綿陽における学前の農村留守兒童の生活品質に関する研究」（中国語：四川绵阳农村学前留守儿童生活质量研究）『南方論刊』2015 年第 8 期，2015，pp.55-58。
- 周考「留守兒童の隔代撫養のモデルと影響の分析—四川省 X 県の調査に基づいて—」（中

- 国語：留守儿童隔代抚养的模式与影响分析-基于四川省 X 县的调查) 江西财经大学修士論文, 2016
- 周国雷「隔代撫養が農村留守兒童の社会化に及ぼす影響に関する研究－徳惠市朱城子鎮を例に」(中国語：隔代抚养对农村留守儿童社会化的影响研究－以徳惠市朱城子鎮为例) 吉林農業大学修士論文, 2017
- 肖悦・劉秀岩・温照洋・楊洋「黒竜江省の貧困地域の農村留守兒童の家庭教育に関する研究」(中国語：黒龙江省贫困县域农村留守儿童家庭教育研究)『学理論 下』2020 年第 6 期, 2020, pp.70-71。
- 秦敏「陝北における農村留守兒童の隔代教育の低効率な現状の調査と対策に関する考察」(中国語：陝北农村留守儿童隔代教育低效的现状调查与对策思考)『山西農業大学学报』第 14 卷第 12 期, 2015, pp.1224-1228。
- 孫一葦「隔代教養下の農村留守兒童の成長状況に関する研究－六安の農村地域例に」(中国語：隔代教养下农村留守儿童成长现状研究-以六安农村地区为例) 長春工業大学修士論文, 2013
- 孫羽燕「隔代撫育が農村留守兒童の社会化に及ぼす影響に関する研究-江西省南昌県岡上鎮を例に」(中国語：隔代抚育对农村留守儿童的社会化影响研究－以江西省南昌县冈山镇为例) 云南師範大学修士論文, 2014
- 張小屏「異なる監護者タイプにおける民族地域の農村留守兒童の社会化の現状に関する比較研究①－貴州省 5 つの民族自治県に基づく実証調査」(中国語：不同监护类型下的民族地区农村留守儿童社会化现状的比较研究①－基于贵州省 5 个民族自治县县的实证调查)『山東青年政治学院学报』2018 年 2 期, 2018, pp.2-7。
- 張晶晶・李士雪・徐凌忠・蓋若琰・惠亞茹「山東省の学齡前の農村留守兒童の家庭養育状況に関する調査分析」(中国語：山东省农村学龄前留守儿童家庭养育情况调查分析)『中国衛生事業管理』2015 年第 1 期, 2015, pp.71-73。
- 程琳「隔代撫養が農村留守兒童の人間関係に及ぼす影響に関する研究－松原市宁江区孫喜村を例に」(中国語：隔代抚养对农村留守儿童人际交往的影响研究－以松原市宁江区孙喜村为例) 長春工業大学修士論文, 2017
- 董蔚然・鍾景迅「異なる家族構成が農村留守兒童の自己効力感に与える影響に関する研究－広東省の 15 の県にある 107 の農村学校の留守兒童を例に」(中国語：不同家庭结构对农村留守儿童自我效能感的影响研究-以广东省 15 个县域 107 所乡村学校留守儿童为例)『教育導刊』2023 年 7 月, 2023, pp.86-96。
- 董士曇・李梅「農村留守兒童の監護問題と犯罪の実証研究」(中国語：农村留守儿童监护问题与犯罪实证研究)『中国人民公安大学学报』2010 年第 3 期, 2010, pp.133-139。
- 任潤「隔代撫養が農村留守兒童の行動習慣に及ぼす影響に関する研究」(中国語：隔代抚养对农村留守儿童行为习惯的影响研究) 中南大学公共管理学院修士論文, 2013
- 李維亞・張豪「隔代撫養が農村留守兒童の心理発達に及ぼす影響に関する個案研究」(中国語：隔代抚养对农村留守儿童心理发展影响的个案研究)『校園心理』第 12 卷第 3 期, 2014, pp.208-210。
- 李倩玉「隔代親合と農村留守兒童の積極的/消極的感情の関係：友情の質の調整効果」(中国語：隔代亲合与农村留守儿童积极/消极情绪的关系：友谊质量的调节作用) 山東師範大学修士論文, 2019
- 陸叶「農村留守兒童の成長と発達に関する調査報告」(中国語：关于农村留守儿童成长发展的调查研究)『淮海工学院学报』第 8 卷第 11 期, 2010, pp.106-109。
- 劉貝貝・青平・肖述瑩・廖芬「食品消費の視点から見た祖父母世代の溺愛が農村留守兒童

- の健康に及ぼす影響—湖北省を例に」(中国語：食物消費視角下祖輩隔代溺愛對農村留守兒童身體健康的影響-以湖北省為例)『中國農村經濟』2019年第1期, 2019, pp.32-46。
- 劉馨月・章丹・徐志剛「学前における隔代撫養が農村留守兒童の學業成績の長期的影響—家庭の早期教育の作用メカニズムと教育能力の調整効果に対する考察」(中国語：学前隔代抚养對農村兒童學業表現的長期影響-對家庭早教作用機制和教育能力調節效应的审视)『農林經濟管理學報』第20卷第3期, 2021, pp.393-401。
- 劉宏雁「留守兒童の科學的リテラシーの問題に関する浅析」(中国語：浅析留守兒童的科學素養問題)『西南農業大學學報』第9卷第2期, 2011, pp.151-155。
- 劉芳「農村隔代撫養における兒童の道德教育に関する研究—X家庭を例に」(中国語：農村隔代抚养兒童的道德教育研究-以X家庭為例)四川師範大學修士論文, 2018
- 于佳琪「農村留守兒童の學校でのパフォーマンスに対する家庭教育のサポートの影響—2020年中國家庭追跡調査に基づいて」(中国語：家庭教育支持對農村留守兒童在校表現的影響研究-基于2020年中國家庭追蹤調查的證據)『長春大學學報』第33卷第7期, 2023, pp.8-17。
- 樊翠娟「異なる留守タイプの農村留守兒童の心理健康の差異比較」(中国語：不同留守类型的農村留守兒童心理健康的差異比較)『長江大學學報』第7卷第3期, 2010, pp.349-351。
- 汪采玉・賈勇宏「隔代撫育が農村留守兒童の社會化に与える影響に関する研究—2013～2014学年の中國教育追跡調査の基礎データに基づいて—」(中国語：隔代抚育對農村留守兒童社會化的影響研究基于中國教育追蹤調查—2013-2014学年基线数据)『曇南農業大學學報』第16卷第6期, 2022, pp.28-35。
- 袁鳳琴・袁真強「農村留守兒童の家庭教育の問題と対策研究」(中国語：農村留守兒童家庭教育問題及对策研究)『貴州師範學院學報』第26卷第2期, 2010, pp.82-84。
- 趙尉「隔代撫養のモデルが農村留守兒童の社會化に及ぼす影響に関する研究—南岳區南岳鎮を例に」(中国語：隔代抚养模式對農村留守兒童社會化的影響研究-以南岳區南岳鎮為例)湖南師範大學修士論文, 2011
- 趙景欣・張婷・林玲玉「隔代親和と農村留守兒童の抑うつ：留守における悩みの認知評価の媒介作用」(中国語：隔代亲合与農村留守兒童的抑郁:留守煩惱認知评价的中介作用)『中國臨床心理學雜誌』第24卷第6期, 2016, pp.1092-1097。
- 霍紅・賈喜平・劉濤「平涼市における留守小學生の怪我に影響する要因の多重対応分析」(中国語：平涼市留守小學生伤害影响因素多重对应分析)『中國學校衛生』第44卷第5期, 2023, pp.756-764。
- 韋婷婷「農村留守兒童の隔代教育の問題に関する研究—穿山町Y村を例に」(中国語：農村留守兒童隔代教育問題研究-以穿山鎮Y村為例)『農村經濟と科技』第32卷第13期, 2021, pp.328-330。
- 馮露霜・陳麗「養育方法が留守兒童の主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究—彭水のあある小学校を例に」(中国語：抚养方式對留守兒童主觀幸福感的影響研究-以彭水某小學為例)『教育觀察』第8卷第5期, 2019, pp.9-11。
- 鮑一帆「農村留守兒童の隔代教養問題及び解決策—以江蘇省宿遷市にある農村の留守兒童を例に」(中国語：農村留守兒童隔代教養問題及解决对策-以江蘇省宿遷市某村留守兒童為例)『農村・農業・農民(B版)』2022年6期, 2022, pp.61-63。

引用・参考文献

- 吳霓「農村留守兒童問題の調査報告」（中国語：农村留守儿童问题调研报告）『教育研究』2004年第10期，2004，pp.15-18。
- 郝明松「父母の外出モデルと農村留守兒童の学業成績—二期 CEPS データに基づく再考察」（中国語：父母外出模式与农村留守儿童的学习成绩-基于两期 CEPS 数据的再探究）『人口学刊』第44卷（通算第255期），2022，pp.34-47。
- 王紅英・李勝・劉應琰・王子琪「隔代育兒が中国兒童の健康狀況への影響」（中国語：隔代照顾对中国儿童健康状况的影响）『中国学校衛生』第42卷第1期，2021，pp.46-49。
- 許琪「父母の外出が農村留守兒童の学業成績に与える影響」（中国語：父母外出对农村留守儿童学习成绩的影响）『青年研究』2018年第6期，2018，pp.39-51。
- 江立華「留守兒童の問題と問題化——留守兒童問題研究のレビュー」（中国語：留守儿童的问题与问题化——留守儿童问题研究综述）『中国兒童文化』2013年第00期，2013，pp.43-53。
- 江立華「留守兒童問題の構築と研究の反省」（中国語：留守儿童问题的建构与研究反思）『人文雜誌』2011年第3期，2011，pp.178-183。
- 柴江「異なるタイプの特殊な家庭にいる中学生の社会適応能力の比較研究」（中国語：不同类型特殊家庭中学生社会适应能力的比较研究）『塩城師範学院学報』第40卷第5期，2020，pp.70-79。
- 周偉「3割の留守兒童が自分の親への憎しみを直言—江西省盤古山鎮の調査が明らかにした留守兒童問題の解決の緊急性」（中国語：三成留守孩直言恨自己的父母-江西盘古山镇的这项调查揭示了解决留守孩问题的紧迫性）『新華每日電訊』第6版，2005年3月29日
- 周福林・段成榮「留守兒童に関する研究レビュー」（中国語：留守儿童研究综述）『人口学刊』2006年第3期，2006，pp.60-65。
- 周鵬「隔代撫育の支持者の特徴研究」（中国語：隔代抚育的支持者特征研究）『北京社会科学』2020年第3期，2020，pp.90-101。
- 段成榮・頼妙華・秦敏「21世紀以来の中国における農村留守兒童の変動傾向に関する研究」（中国語：21世纪以来我国农村留守儿童变动趋势研究）『中国青年研究』2017年6期，2017，pp.52-60。
- 段成榮・楊舸「我が国の農村留守兒童の狀況に関する研究」（中国語：我国农村留守儿童状况研究）『人口研究』第32卷第3期，2008，pp.15-25。
- 陳斌開・林毅夫「發展戦略、都市化と中国の都市と農村の所得格差」（中国語：发展战略、城市化与中国城乡收入差距）『中国社会科学』2013年第4期，2013，pp.81-102。
- 任運昌「留守兒童の汚名化に対する高度な警戒—一連のフィールド調査と文献研究に基づく呼びかけ」（中国語：高度警惕留守儿童的污名化—基于系列田野调查和文献研究的呼吁）『教育理論と実践』第28卷第11期，2008，pp.3-5。
- 莫艷清「家庭欠如が農村留守兒童の社会化に与える影響及びその対策」（中国語：家庭缺失对农村留守儿童社会化的影响及其对策）『内モンゴル農業大学学報』2006年第1期，2006，pp.150-152。
- 楊璐「単親家庭が小学生の心理的成長に及ぼす影響—離婚家庭の視点から」（中国語：单亲家庭对小学生成长的心理影响-基于离异家庭的视角）『教育觀察』第8卷第15期，2019，pp.78-79。
- 楊菊華・段成榮「農村地域における流動兒童、留守兒童及び他の兒童の教育機会の比較研究」（中国語：农村地区流动儿童、留守儿童和其他儿童教育机会比较研究）『人口研

- 究』第32卷第1期, 2008, pp.11-21。
- 羅国芬・馬春冉「農村留守兒童の調査研究方法の誤用と乱用—一元仮説の視点に基づく反省」(中国語: 农村留守儿童调查研究方法的误用与滥用-基于“元假设”视角的反思)『青年探索』第6期, 2021, pp.35-48。
- 羅国芬「兒童権利の視点から見た農村の留守兒童の再問題化」(中国語: 儿童权利视角: 农村留守儿童再问题化)『學術論争』2018・1, 2018, pp.79-83。
- 羅静・王薇・高文斌「中国の留守兒童研究のレビュー」(中国語: 中国留守儿童研究述评)『心理科学進展』第17卷第5期, 2009, pp.990-995。
- 李炎「農村における隔代教育に関する調査」『四川教育』(中国語: 农村“隔代教育”调研)2003年Z1期, 2003, pp.20-21。
- 李洪曾『隔代教育のメリットとデメリットに関する分析』(中国語: 隔代教育的利弊分析)『山東教育』2002年第33期, 2002, pp.42-43。
- 李洪曾「祖父母世代が養育の主体者としての特徴と隔代教育」(中国語: 祖辈主要教养人的特点与隔代教育)『上海教育科研』2006年第11期, 2006, pp.27-31。
- 李玲「改革開放以来の中国国内人口移動及びその研究」(中国語: 改革开放以來中国国内人口迁移及其研究)『地理研究』第20卷第4期, 2011, pp.453-462。
- 陸銘・陳釗「都市化、都市指向の經濟政策と都市・農村の所得格差」(中国語: 城市化、城市倾向的經濟政策与城乡收入差距)『經濟研究』2004年第6期, 2004, pp.50-58。
- 龍蚩・袁嫚「家庭構造の欠如が子どもの教育獲得に及ぼす影響—単親家庭のサンプルによる実証分析」(中国語: 家庭结构缺失对子女教育获得的影响-基于单亲家庭样本的实证分析)『重慶工商大學學報』第37卷第1期, 2020, pp.35-44。
- 林宏「福建省における留守兒童の教育現状に関する調査」(中国語: 福建省“留守孩”教育现状的调查)『福建師範大學學報』2003年第3期, 2003, pp.132-134。
- 范先佐・郭清揚「農村留守兒童教育問題の回顧と反省」(中国語: 农村留守儿童教育问题的回顾与反思)『中国農業大學學報』第32卷第1期, 2015, pp.55-64。
- 蔡禾・王進「『農民工』の恒久的な移住意向の研究」(中国語: “农民工”永久迁移意愿研究)『社会学研究』2007年6期, 2007, pp.86-113。
- 蔡昉・都陽・王美艷「戸籍制度と労働力市場の保護」(中国語: 戶籍制度与劳动力市场保护)『經濟研究』2001年第12期, 2001, pp.41-49。
- 譚深「中国の農村留守兒童研究の述評」(中国語: 中国农村留守儿童研究述评)『中国社会科学』2011年第1期, 2011, pp.138-150。

引用・参考 Website

- 王亦君「6100万以上の農村留守兒童が適切に世話されることができるか」(中国語: 6100多万农村留守儿童能否被妥善照顾)『中国青年報』2016年2月16日
- 国家統計局、国際連合兒童基金 (UNICEF) 及び国際連合人口基金 (UNFPA)「2013年中国の兒童人口状況の事実とデータ」(中国語: 2013年中国儿童人口状况事实与数据)
- 国家統計局、国際連合兒童基金 (UNICEF) 及び国際連合人口基金 (UNFPA)「2015年中国の兒童人口状況の事実とデータ」(中国語: 2015年中国儿童人口状况事实与数据)
- 国家統計局、国際連合兒童基金 (UNICEF) 及び国際連合人口基金 (UNFPA)「2020年中国の兒童人口状況の事実とデータ」(中国語: 2020年中国儿童人口状况事实与数据)
- 國務院「農村留守兒童におけるケアと保護の強化に関する意見」(中国語: 关于加强农村

留守儿童关爱保护工作的意见) (国発「2016」13号)『中国婦女報』2016年2月4日
中国民政部「留守児童の数は、主に6歳から13歳の年齢層に集中している」(中国語: 守
児童数量主要集中在6到13岁之间), 2018
楊耕身「唯一『共同生活』が留守児童を救うことができる」(中国語: 惟“共同生活”能解
救留守儿童)『京華時報』2016年2月16日
李博晶「中国の留守児童が6100万人に達し、両親が健全な孤児と呼ばれている」(中国
語: 中国留守儿童达6100万被称为父母双全的孤儿)『京華時報』2016年2月17日
姜天驕「調査: 921万の留守児童が1年に一度も両親に会えない」(中国語: 调查: 921万
留守儿童一年见不到父母)『經濟日報』2015年6月25日